

資料

十周年記念の集い（昭和四十年十月）

第十回「合宿教室」  
（別府市  
城島高原）  
感想文集

社団法人 国民文化研究会

高木尚一

大布おほぬを木の間に張りて友ら迎ふ言葉しるせり  
墨すみくろぐろと

この言葉我は忘れじ全国の友ら迎ふるその言  
霊たまを

宿に入れば友らいませり深き思ひ内にたゝへ  
てほゝゑむ友らよ

夜久正雄

足らはざる心ながらに心つくして太子の御言  
葉つたへまつりぬ

こともなくよみすぐすべき経典の一語一語を  
きはめたまへり

ひろやかにとどこほりなきみことばのしらべ  
にみ子のみ心あふぐ

# 第十回「合宿教室」

(別府市  
城島高原)

## 感想文集

### 目次

はしがき	二
日程・講義および概要	五
この「合宿教室」を総括的に回想して	一三
走り書きの感想文	一五
短歌詠草(しきしまの道)	七〇
あとがき	八一

## はしがき

私どもは、過去十年間、国家の運命を内に支える同胞的連帯感を国民各層、とりわけ若い青年学生の胸につちかいたという悲願から『合宿教室』—研究集会—を運営してきた。私どもはまた、イデオロギーの対立や論争以前に、人間として、日本国民として相和し、睦び合う精神的基盤のあることを信じ、起居を共にしながら、心と心の触れ合いの体験、感激を通じて、確固たる人生観を確立し、新しい学問を興こそうとしてきた。だが、この十年の歩みをかえりみると、微力な私どもにとつて、それは遅々とした、しかも苦難にみちた歩みであった。

この小冊子は、この夏別府城島高原で行なつた四泊五日の合宿教室の閉会式直前、二、三十分間の短時間内に全参加者にしたためてもらつた感想文について、文意の不明瞭な個所や、誤字、送りがななどを正し、その大部分を集録したものである。もとより参加者自身が自分の体験、気持ちを整理しきれないまま、胸中の思いをうちつけに記したもので、筆者としてもじゅうぶん意を尽くせなかつたことはいうまでもない。しかし、これらの感想文をお読みいただくことができ、私どもの意のあるところ、日ごろ心を傾けて努力していることの一端でもご理解いただくことができると念じつつ、以下、主催者としての所感を述べさせていただくことをお許し願いたい。

私どもは、これらの感想文の中に、若い青年学生たちが、日本人として自己の生命に澗然として目ざめた心の経過が記されていると思う。それはまた、口を開けば人間尊重が叫ばれながら、個人、自我の尊重のみが優先してしまつている現代の思潮に、一つの疑問を投げかけているようにも思われる。この感想文集には、個人、自我

尊重に偏りすぎた教育に対する青年学生たちの心底からの疑問が、提示されてはいないだろうか。

いままで、人の真心に感動することすら知らなかった（と自ら告白する）学生が、真心に触れ合った体験——喜びを飾らずに記していることは、理論追求のみに急な現代教育の中で、情意、情感を正しく持つことの重大な意義を、自己の心に確認し得た姿であるともいえよう。聖徳太子は、いまから千四百年前に十七条憲法の中で「よく教うれば之に従う」と仰せられているが、よく教える、つまり全身心を傾けて教えるならば、迷いがちな若い人たちも、りっぱに精神的転回（感想文のあとに掲載してある「短歌詠草」の書きの後段をご参照願いたい——ページ）をなし得るのである。

しかし、そうした精神的転回は、決して安易な方法でなし遂げることではできなかった。そこに至るまでには、合理的な判断だけに依存していた昨日までの自己をきびしく見つめ、さらにそれを克服して、正しい情意の中に身を置こうとするすさまじい勇気が、参加者の一人一人に必要であった。

この合宿にお出でくださった岡潔、木内信胤、花見達二、玖村敏雄、上田通夫、筒井清彦の諸先生方のご講義ご講話は、すべて青年学生の心情の開発を願う一途なお気持ちに貫かれていた。それは世間でいう講義、講話とはかなり違ったものであったし、むしろ若い人々の健全な成長を願う「祈り」にも似た訴えでさえあった。また全国から馴せ参じた本会三十名の社会人も加わって行なった班別討論、古典の輪読、さらに二回にわたって、講師、助言者を含めて全参加者が一人残らず行なった短歌創作の修業。それらを通じて参加者の大部分が、日本文化の本質と良さとをしみじみと心に感じ、いままでの自分から脱皮しようとする勇気を振り起こす機縁になったように見受けられる。

こうして、この筆者たちは「なぜ、このようなことを、いままで教えてもらえなかったのか」と、改めて自らの過去を振り返る。そしてこの人たちは、戦後の教育を受けてきた自分を見つめ、自らの心に正しい情意を取り戻そうと、心ひそかに決意したようである。「これではいけない」と、自らに鞭打つ学生たちの心に、なにか

が通いはじめたのであろうか。祖国のために生き、かつ死んでいった先人の魂が、若い人たちの心の中に生き生きと実感されだしたのかも知れない。

こう見てくると、現代の青年学生が真に求めてやまないものは何であるのか、それがようやく明らかになってきたように思われる。すなわち、それは世間で学問と名づけられているイデオロギーや、膨大な理論体系などではなくて、自分の心、自分自身の心の正しいあり方を、きびしく教えてもらいたい、という切実な願いにほかならなかった。率直にいわせていただくならば、現代の学校教育が、この若い人たちの秘められた願いに對して、ほとんど応えていないというのが、多くの参加者たちの実感でもあったようである。

こうした編者の所感が当を得ているかどうかは別として、この冊子をお読みくださった方々が、もしこれらの感想文の行間から、現代教育の問題点がどこにあるかをお掴みとりいただけるならば、それは私どもの望外の喜びである。

また、印刷に付するに当たって、筆者に掲載の可否を問い合わせるべきであったが、「記念の集い」に間に合わせたいという時間的制約のため、それができなかった。だが、筆者たちも、この感想文発表の意義をじゅうぶんに理解され、私どもとともにその喜びを分かちあってもらえるのではないかと思うのである。

# 日程・講義および概要

と き 昭和四十年八月二十日～八月二十四日

と ころ 大分県別府市城島高原「ホテルきじま」

第 一 日 (八月二十日・金曜日)

開 会 式 (午後二時三十分)

国 歌 斉 唱

黙 禱 ▲われらの祖国を守るために、いのちを捧げられたすべての祖先のみ霊に対し、一分間の黙禱を捧げます▼  
あいさつ

国民文化研究会理事長 小田村寅二郎氏

大学教官有志協議会 夜久正雄氏

亜細亜大学教授 熊本大学法文四年 平 休 憲君

合宿開始にあたって (オリエンテーション)

幹部学生代表

九州大学 法四年 西 元 寺 紘 毅 君

○講 義 「われ自由を翹望し、平和を渴仰す―自己と祖国と人類に普遍する道を求めて」(一時間三十分)

理事長(亜細亜大学講師) 小田村寅二郎氏

班別自己紹介の時間（一時間）

夕食・入浴（二時間）

○講義 「吉田松陰著『講孟余話』について」（二時間三十分）

修猷館高校教諭 小柳陽太郎氏

班別懇談（二時間）（十時就床）

（検討会）（二時間）午後十時～十二時（班長・副班長・助言者）

第二日（八月二十一日・土曜）

起床（六時三十分）国旗掲揚、体操、朝食

○講義 「現代日本の課題—革命史の実相にかんがみて—」（二時間）

鹿児島大学助教授 川井修治氏

班別輪読 「新しい学風を興すために」第三集中の「思想の形成」の項を輪読（二時間三十分）

○講義 「『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の本の読み方ならびに和歌創作の手びき」（二時間）



亜細亜大学教授 夜久正雄氏

第一回和歌創作（二時間）（創作総数六百七十余首）

○十五分間ずつの短いお話

労働科学研究所維持会事務局長 高木尚一氏

鹿児島大学教授 上田通夫氏

九州大学教授 岡田武彦氏

班別討論 (二時間)

現時点における各人のさまざまな思いを、自分自身の問題として受け止めて、語り合った。

第三日 (八月二十二日・日曜日)

〇講義 「私の構想する世界の新秩序

——緒言・世界新秩序の基礎・世界国家か個別国家か・新秩序の要点・思想的吟味—— (二時間)



世界経済調査会理事長 木内信胤氏

質疑応答 (一時間)

第一回創作和歌についての講評 (一時間)

亜細亜大学教授 夜久正雄氏

講話 「日本の情緒について」 (一時間二十分)



奈良女子大学名誉教授

岡

潔氏

質疑応答 (四十分)

写真撮影

パネルディスカッション(午後七時から一時間三十分)

「国語・国字問題および今後の教育について」



木内信胤氏

岡 潔氏

花見達二氏

の三氏を中心にして

国語問題は早急に結論を出し、旧仮名遣いを復活しなければならぬことが、三者三様ながら共通して力説された。

和歌相互批評 (班別にて) (一時間三十分)

班員同士の相互批評は、精神交流について、すばらしい効果を挙げていった。

第 四 日 (八月二十三日・月曜日)

○講 義 「日本政治の憂うべき動向」 (二時間)

質疑応答 (三十分)



政治評論家 花見達二氏

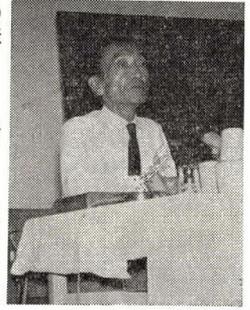
班別討論 (一時間)

地区別、大学別懇談会 (二時間)

鶴見岳登山 (午后二時出発、午后五時三十分帰着)

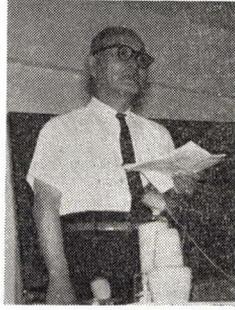
第二回和歌創作 (午后七時までに提出) (創作総数六百七十余首)

○講 話 「山鹿素行について」 (四十分間)



大分大学学芸学部長 筒井清彦氏

○講話 「吉田松陰について」(土規七則の読み方指導)(一時間)



福岡学芸大学学長 玖村敏雄氏

全体交歓 (一時間)

簡単な立食パーティー式の交歓会

第 五 日 (八月二十四日・火曜日)

○講 義 「天皇と天皇の御歌について」(一時間)

若松高校教諭 山田輝彦氏

全体意見発表（一時間）

（国民文化研究会）会員 長 内 俊 平 氏

第二回創作和歌の講評（三十分間）



（写真は助言者たち）

「合宿を終るにあたり所感を述ぶ」（二十分間）小田村 寅二郎 氏

感想文執筆（三十分間）

閉 会 式（午后一時）

国 歌 斉 唱



あいさつ （大学教官有志協議会）鹿大教授 上田 通夫 氏

（国民文化研究会）理事 宝 辺 正久 氏

（学生）京大法学二年 福 島 義 治 君

（写真は上田氏）

参加者(学生) 東大 京大 九大 長崎大 熊本大 鹿児島大 滋賀大 岐阜大 富山大 新潟大 神戸大 大分大 岡山

大 佐賀大 宮崎大 横滨国大 東京学芸大 福岡学芸大 東京工大 東京理大 防衛大 早大 中大 日大法政

大 亜細亜大 駒沢大 東京経済大 高崎経済大 玉川学園大 鹿児島経済大 熊本商大 学習院大 西南大 電子

工業大 福岡女子大 東京女子大 津田塾大 武蔵野短大 下関市大 大阪経済大

(社会人班) 中小学校教諭 信用組合 百貨店 会社員 教育委員 計二〇〇名

助言者

前武雄市教育長

大分県・国見町教育委員会・教育主事

共同通信社論説委員

電源開発(株)施設業務課

計理士・税理士

福岡・筑紫女学園高校教諭

アサダ皮革(株)社員

県立横浜翠嵐高校教諭

三井銀行和歌山支店

早稲田大理工学部大学院

皇宮護衛官

玉造・(有)こんや旅館代表者

光村図書出版(株)社員

毛利 潮

三重野 梯次郎

島田 好衛

長内 俊平

小泉 靖明

行武 枝

上村 正波

国武 忠彦

徳地 康之

山本 博資

亀井 孝之

青砥 宏一

百崎 素明

長崎・宇宙書房代表者

安田信託銀行五反田支店長

千代田コンサルタント(株)総務課長

大成建設(株)福岡支店土木部

新技術開発事業団職員

福岡県立宇美商高教諭

日商(株)経理部

熊本市役所経済部課長

下関・(株)宝辺商店

岡山県立笠岡商高教諭

熊本県林業研究指導所指導部長

三菱重工本社国内船部

山陽電軌(株)

長崎大学学生部

脇山 良雄

松吉 基順

上村 和男

田中 秀男

野間 行正

小林 国正

沢部 寿孫

徳永 正巳

宝辺 正久

名越 正助

瀬上 安正

小島 一也

加藤 善之

植木 九州男

## 「合宿教室」を総括的に回想して

第三班班長  
中央大学商三

磯 貝 保 博

全国の学友と寢食を共に過ごした四泊五日の合宿教室を終え、ある人は心の動揺を整理し得ぬままに、ある人はこれらの学生生活に希望を持ちながら、それぞれの思いを抱きつつ城島高原を下って行った。長かったようにも、短かったようにも感じられるこの数日間のきびしい日程の中で、私たち青年の未知なるものへぶつかって求めようとする探究心は、友と友との真摯な言葉の語りを通して、あるいは諸先生方のご講義をお聞きして一度に燃え上がり、そして今、心の疲労感となって体に伝わってくる。しかしそれは力を尽くした後后感ずる充実感に似た、快い疲労であると思う。私たちはお互いが心を開いて語り合うことによって、今まで一度も会ったことのない友に対して、何のわだかまりもなく、おのずと親しい気持ちになるのを身をもって学び得たのです。人と人が心を通わそうとする、ひたむきな姿勢に基づいた一体感があったからこそ、真剣にそれぞれの問題に取り組めたのだと思います。

岡潔先生のご講話は、私たちに深い感銘を与えて下さいま

した。先生が「日本の情緒についてお話しをしよう思うのですが、言えそうもありません。だから、言えそうもないことを言ってみようとするのです」と前置きされるお言葉に、私は何かしら引きつけられるようにじっと耳を傾けてしまいました。大変簡潔で、しかも力強い響きを含んだお言葉を聞いて、日本人の心を持った人の言葉の美しさに眼をみはったのです。私は人格に触れる、ということは、このようなことではないかと思いました。

知情意について先生は、人と人が生活する時に一番大切なのは情であると言われ、知では情はわからない、一方意は、情をおさえてしまうのです、と言われました。情がわかるということとは、人の心を察することができるということだと思ふ。人の心をわかるうとしなければ、対象をそのまま見つめることができなくなり、物事を行なうにも粗雑になって、観念的にしか考えられなくなってしまう。このことは、私たちにとって、一つに捉われてしまった先人観で物を見たり考えたりする学問態度では、先生の言葉の底にあるお気持ちを掬

み取ることは、決してきでるものではないということ  
です。先生が学生の質間に答えて「あなたは日本の情

緒がありません」と言われた言葉に、私たちは深く心を留めなければならぬ。日本人として生をうけてきた私たちが「この国のことが心配でたまらない」と憂えておられる先生に対して、憂うべきことを憂う心がなくなつて、結局は自分のことだけを考えてしまつて、恥ずかしく思わねばならない。最終日に小田村先生は、稚気から脱せよと言われました。物事の本と末を見きわめ、私たちの末に捉われた稚気から脱け出さねば今に本が分らなくなつてしまうのです。玖村先生もまた、士規七則のご講義の中で、私たちが今何を考え、何をなさねばならぬかを教えて下さいました。松陰が従弟の玉木彦介の元服に当たり成人としての心構えを示して言われたことは、私たちにとって稚気



全員の記念撮影

を取り払った成人にならねばならぬことを言うのであろう。  
彦介よ、まず人でありなさい。そして日本人としての自覚を

持ち、しかも武士になりなさい。さらに「士の道は義より大なるはなし」と説き、全体と個を考えて学問するのが武士である、と言っています。私たちが国の為に命を尽くすということが当たり前にならねばおかしいのです。「義は勇に因りて行なわれ、勇は義に因りて長ず」——すなわち勇氣というものは義を行なおうとする時に本当に強いものとなる。合宿後、人それぞれ感ずる思いを持って帰られただろうが、末に拘泥することなく、勇と義が相伴つて動き始めねばならない。口先で勇氣を持つと言うのなら簡単である。勇とはからいばりではない。義を行なおうとする志によって強くなる。それだけに毎日々の生活をきびしく見つめる真剣な学問の姿勢から、初めて本物の勇氣となる。

私たちは合宿で多くの友を知ることができ、それらの人々が懐しく思われてくる。それは私たちの心と心を通じ合えたからこそ感じるのである。この気持ちを持続してゆかねばならない。そしてさらに全国に別れた友が、皆と共に「文をもって友に会し」てゆくことによつて、合宿後もすばらしい心の交流が行なわれることを切望してやみません。

# 走り書きの感想文

## 気迫・喜び・決意

すざまじい力で迫ってくる気迫、自己の思いを、堂々と述べられる気高いまでの風格。この合宿で接した諸先生から直接身をもって感じたこの実感は、自己の小さな生命の火に、油をそそいでいただいたような気がいたします。

「すごい」という言葉が諸先生のご講義の後でおのずとわきあがってくる思いでした。それとともに、一人の人間の「すごさ」を自分の全身でしっかりと受けとめ得たと確信できたことは本当にうれいことだと思います。先生の一つ一つのお言葉が、現在もなお自分の心の中に先生の風格とともに生きているのを感じます。偉大な人格に触れる喜びを、私は今年もこの合宿で経験することができました。先生方の思いを受け継がずにはおくものかと、ここで感じた実感はかならず日常の生活の中に甦えらせうると確信できる程強烈なものであります。

また、あくまでも謙虚に、何かを求めてやまぬ姿勢で学問している数多くの新しい友を直接知ることができたのも、こ

の合宿で得たすばらしいものの一つです。一人でも多くの新しい友を得たいと願って合宿に参加した僕にとって、それはかけがえのない喜びです。四年間の合宿生活で得た数名の友人を、僕は一生の宝として何よりも大切にするつもりです。僕の大学生活の全てだと言ってよいこの合宿教室。誇張ではなく、本当に倒れるまでやり抜くつもりで参加したこの最後の合宿が終わったいま、真に思い残すことがないと言えることは、何にもましてうれしいことです。僕の一生はこの合宿で決まったと確信いたします。今後どのような困難障害があろうとも、僕はやり抜く覚悟でおります。

閉会式に臨み、これまでの合宿の様々な思いが次から次へと浮かび、涙がにじみ出てまいりました。一生に何度経験できるかわからぬこの感動をかみしめながら、すがすがしい気持ちで合宿を終えることが出来たのを心から幸せに思います。

(九州大学 法 四年 西元寺紘毅)

## 日本の情緒に感激

ここへ来るまでは、何かをつかもうという気持ちはあった

にせよ、冷かしのな気持りが多分にありました。つまり小田村先生や夜久先生は保守反動の思想家だと思っていました。それで保守反動の思想家は何を考えているのか見てやろうという、反発してやろうという気持ちでもありました。

しかし、合宿教室が、日一日と進むにつれ、だんだんと小田村先生をはじめ諸先生にひきつけられていく自分をどうすることも出来なくなりました。いまはもうここへきてよかつたという気持ちでいっぱいです。岡先生の話をお聞きして確かにいままでの自分—小我にとらわれていた自分に思い当たることがありました。いままでどうして素直にそれを認めることができなかったのか残念でなりません。日本の心情に触れ、感激したことは岡先生にいわれるまでもなく多くあったのです。しかし、そのつど自分はなんと封建的なんだろうと自分を軽蔑してきました。それを軽蔑することが、いかにも人間らしいことのように思い込んでいたのです。それは寂しいことでした。

しかし、今日からは誇りを持って日本情緒に接し、素直に感激できる自分を取り戻すことができます。これがこの合宿で得た最大のものです。また、若き日の松陰先生に心で接し、もつともつとがんばらなければと心ひそかに決意しました。

(富山大学 工 二年 岸本 弘)

### 生き返ったような気持ち

私はこの合宿に死にも狂いでやってきました。ここへくるまでの私は大変な病氣だった。病氣といっても身体の病氣ではない。じわりじわりと家の柱を噛み砕く白アリに心がむしばまれるような心の病氣であった。

どうしてこう人を疑わねばならぬのか。その因は自己の中にあるのか、他人の中にあるのか、安心立命するような場はないのか、またそういう人間関係はないのだろうか。

家庭の中でも、町の人々の中にも、この日本に真に安心立命する所を見い出そうと願ってまいりました。このような心の苦しみは死を思うほど苦しかった。本当に絶望する時とは、人間が分らなくなる時でしょう。

合宿では友と心から交わることができ、友の真情をくみ取ることができました。私も思うさまに心の悩みを語ることができ、またそれに対し友の生命のこもった意見を聞くことができました。私は今本当に生き返ったような気持ちです。ありがとうございました。

(玉川大学 文 二年 斉藤松一郎)

### わからなくなった、だが真心を知った

前からの遊び疲れも災いしたのかもしれませんが、まず何といっても心身ともに疲れきったという感じです。それにし

ても精神的な疲れをこれほどに感じたことは、いままでも  
そうありませんでした。

合宿参加の初めのころは、そう大した意気込みもなく参加  
したのですが、終わりに近づくにつれ、次から次へと提出  
される問題に、また諸先生方や先輩諸兄らの熱意に接し、安  
易な気持ちは雲散霧消してしまいました。しかし、考えれば  
考えるほど、問題はわからぬことばかり、また従来から自分  
の持っていた考えとの矛盾、かつとうが起り、私の頭の中は  
大混乱をきたしてしまいました。

正直にいつていまの私は何もわからなくなってしまうたよ  
うです。いままですてに大学に入ってからのは自分の持つて  
いる問題、悩み等を解決したいと色々な本を読んでみました  
が、どこにもこれぞと思うものは見い出せずにきました。し  
かし、ここにきてますますその混乱は大きくなってしまいま  
した。

ただここで得た収穫は小柳先生、玖村先生にお会いして人  
の心を動かすものは、真心と信念であるということを知った  
ことです。そこからあのような熱のこもった力強いお言葉が  
生まれるのでしょうか。(東京大学 経 三年 香取一昭)

### 満足感を得た

僕がこの合宿に参加してみたと思った一番の動機は、こ

の夏休み中に今まで経験したことのないような有意義な日々  
を送りたいということです。この合宿については友人からそ  
の趣旨をじゅうぶん聞かされ感動したことで、僕の前々から  
の希望を満たしてくれるのではないかとという予感をいだけ  
て参加したいです。

その結果はこの四泊五日の合宿において、まったく「満足  
感を得た」という一言につきます。確かに諸先生方のお話、  
班別討論など数々の行事に僕は目をみはり、心打たれ満足感  
を得ましたが、あまりにも多くの重要な事柄を述べられ迷っ  
てしまいました。その意味では、この合宿で得たことを行動  
にすぐもって行く自信がまだできていないのが残念です。

ここで自信ができていないと書きましたが、実は僕の幼少  
のころに、この国家意識という点に強い関心をもち、幼稚な  
ながらも友人と議論らしいもので争った経験がありました。そ  
の後、全然といていいほど、国家について考えることに情  
熱がわかず、環境その他の壁におさえられて今日に至り、た  
だぼうぜんと暮らしてきたしいです。

しかし、この合宿参加によって昔の僕の本心的なものをよ  
び起こされ、人生の生きがいを感じるようになりました。た  
だそれだけでうれしい気持ちです。

(日本大学 経 三年 橋内英夫)

## 自分の姿勢の甘さを痛感

私はこの合宿を通じて、私個人に対して満たされぬ何かを感じた。

確かに木内、岡先生ほか諸先生のご講義は感動させられる気迫と充実した内容のものであり、それは今後の私の勉強の方法に、また学問に対する姿勢に改革と充実を要求する気迫を感じさせるものであった。そしてまた、それは中学生当時、中学校の先生に接し、または平易ながらも国語の中の精神的なものに接して、血潮のわき上がる思いをしたことをおぼえているが、今回の合宿では大学生、そして内容も充実したその思いを再び感じられたように思う。

私が「新しい学風を興すために」を読んで、この合宿に求めていたものは、国民同胞感を実感として感じることであった。今回の合宿ではそれが感じられず、友だちの話す言葉も何か空虚な上すべりのものと感じられてしよがなかつた。もちろん、私にとって私自身の姿勢そのものが甘つたるく、真剣に自己を見つめる姿勢もひよわで、たんにこの合宿にばかりおぶさるよう期待していたことと、歴史に対する不勉強とがこの結果を導いた。

最後の日の「全体意見発表会」で、一部の人たちが「われわれはもっともつと真剣にみつめよう。」といった言葉が何

かしら感じられた点であった。また同じ班の西元寺さんが班別討論において「僕は、本当にわれわれが現在あるのは、祖先の人たちが命をかけて守ってくれたためだ、という実感をもった。」と話されたが、残念ながら私には理屈でそう考えられても実感は持ち得なかつた。この点にも自分の歴史に対する姿勢の甘さが感じられてしよがなない。

(亜細亜大学 経 三年 秋本紹夫)

## 来年も必ず参加する

師のお言葉を聞き、感激してもものいえなかつた。真にわれわれが生きてべき道に向つて努力しよう。日本と日本民族が真に生くべき道に向かつて、自分はつたなくとも精いっぱい努力するつもりであります。

私は良き師、良き友を得んがために、来年も必ずこの合宿にやつてこよう。いままでの自分は物事を見る眼がなかつた。あまかつた。大道にたつて物をみきわめることができなかつた。小我を捨て、大道におもむかなければならない。そのためにもつとつと勉強しよう。来年合宿教室にやつてくるときは、いまよりも強い精神をもって再び研鑽しよう。私は必ず来年もここにくる！

(福岡大学 法 三年 大草宏一)

## 必死の覚悟でのぞんだ合宿

過去三年間、人間生活のあり方について迷い続けてきた私はその迷いを解決する術もわからぬまま、それこそ必死の覚悟でこの合宿教室に参加しました。それでいまここに合宿を終わり、故郷の東北に帰ろうとするに当たり、腹の底から本当にきて良かったと、心の底から思うのです。

玖村先生のご講義の中に「義は勇に因りて行なわれ、勇は義に因りて長ず」とありましたが、今になって思えば私自身いくらやる気を出そう、勇気を振るい起そうととしてもどこか不安であり、物足りないものを感じてきましたが、それはやはり義を知らなかったからだと思います。

この合宿教室で諸先生方の力強い御講義を御聞きし、確固たる自分の方向をつかみ得ましたので、現在の自分の努力不足、勉強不足を痛感し、大きな理想と自信を持って努力するつもりです。

(防衛大学 四年 大越雅行)

## 不勉強が恥しくなった

先輩の紹介でこの合宿を知り、夏休みでこれだけは必ず参加すると決め、大変期待して参加しました。四泊五日の最終日に際し、期待以上にものすごい毎日であったと何かしらホ

ッとした様な気も致しております。いままでの不実と不勉強とが恥ずかしく、これから先の大学生活に何かしら確としたものができたような気がします。

この機会に小柳先生を知り、また玖村先生というすごい先生も知ることができました。今一度会ってみたい気持ちで一杯です。来年も必ず参加するつもりです。そしてそれまでには、先生たちのお話しがもっともっと確実に身につくように勉強するつもりです。この合宿に学生の研究発表というのを設けてみてはどうかということをご提案してみたいと思います。本当に来てよかったです。来年は友人たちと一緒にまたきます。

(西南学院大学 商 一年 古賀宜弘)

## 日本人としての自覚

私は大合宿へ二度参加しました。昨年の桜島合宿では日本人としての自覚の大切さを初めて教えていただき、また自分で気がつきました。その合宿で得た経験を帰ってから、親しい友に伝えるという努力を自分なりにやってきましたが、自分が一生懸命に話せば話すほど、友だちはそれだけ一層批判的、ないしは無関心な風を装うのです。なぜ友は素直に聞いてくれないのかなあ、と友をうらめしく思っていました。この合宿へきて、自分には友に、この日本人としての自覚を伝える勇氣は持っているのだが、この自覚を強めていく勉強を

欠いていたということを知って大変驚き、かつくやんでいま  
す。

やはり自分は小我にとらわれていた。自己は他との関係を  
深め強めていくに従って自らの身を清め、虚心になっていく  
ものです。この心を虚にするということは、口ではたやすく  
いえることですが、身で行なうことはなかなか出来ぬこと  
です。できる、できぬで済む問題ではなく、ぜひ心がけねばな  
らぬ問題です。自分はこれから大学生活で自分のためとい  
うばかりでなく、家のため、国のためを思い、できる限り勉強  
していきたいと思っております。

(京都大学 法 二年 溝江 優)

### 心の触れ合う感激

不安と期待でやってきた時の自分の心と、合宿の終わろう  
としているいまの自分の気持ちは確かに異なっている。なん  
となく充実したような感じもする。目をつぶると諸講師の方  
々や友人たちがそれぞれに心に浮かぶ。自分の意見をうま  
くい表わせない時のもどかしい気持ち、自分の気持ちをわか  
つてもらった時のうれしさ、理路整然と述べる友の心のこも  
った態度、ちよっとした心の融れ合い、感激、興奮は、これ  
からの自分に何を意味するのだろうか。

今後この感激が薄らいだり、努力を怠るようなことがあつ

てはつまらぬし、そういったことではだめだと思う。もう一  
度、静かに合宿をふりかえってみようと思っている。

(鹿児島経済大学 経 一年 横手満雄)

### 考える事の難しさ

私は四年生で就職や教育実習で忙しかったし、また参加し  
てもどの位成果があるかわからなかったため、率直にいつて  
始めは積極的に参加する気がしなかった。ちよほど合宿の途  
中に就職試験があり、せいぜい二日間しか参加できないこと  
になり、参加はよそうかとも思ったりした。

「ぜひにおいだけでも」という川井先生の強いおすすめが  
あり、途中から参加しました。いまは二日間だけでも参加し  
てよかったという気持ちで一杯です。言葉ではうまく表現で  
きませんが、何か身体全体で感じとれたものがありました。  
少しきつと思うこともありましたが、団体生活である以上  
やむを得ないとも思いました。いまの学生の大半は社会主義  
思想とか、西洋人的思考法といった考えを理解しない人を軽  
蔑する気風があるように思いますが、そういう人々も、この  
ような合宿に参加した時には、きっと自分自身で考えるとい  
うことの難しさを知ることと思います。とにかく意義深い合  
宿でした。

(鹿児島大学 文理 四年 川原貞孝)

## 初参加の感銘

まず、いままでの自分の生き方、行動について深く考えさせられました。一体こんなに真剣に考えてみるという会が今まであったでしょうか。何のためにこれほど考えねばならないのか、と中途にして思うこともありました。

ふだんは、いわゆる惰性で、享楽にふける傾向の強い現代にあつて、先賢の歩みをたどることによって、歴史の再経験ともいふべききっかけをつかめたことが、最大のような感じがした。このよろこびを精神革命に結びつけることが、どんなに困難であろうとも、努力と研鑽のつみ重ねが、どのようにすばらしく尊いものかを身にしみて感じます。

「新しい学風を興すために」第三集によると、真剣に生きようとする情熱、人間同志が信じ合えるという確信、学問への真剣な姿勢、この三つを求めるためにつどのだと集約されていきました。私自身、初参加のこの合宿でこの三つの要素になつたかどうか、いささか疑問です。しかし少くともあらゆることにつけ真剣に考えてみる、という心の姿勢が実感として伝つてきました。大学生として当然のことですが、この当然のことが理論のみで終わり、身にしみて感じられなかつたことをかえりみるにつけ残念でなりません。これを契機として、もっと自分を厳しくみつめ、真剣に考えるという方

向にむかつて、前進し続けたいと思います。

玖村先生のご講義では、まさにこの合宿に参加した喜びを受け取りました。つい目頭が熱くなり、恩師とはこのような人だと率直に思いました。最後の全体意見発表の時間でも、川井先生の締めくくりがまごころのこもつたすばらしいもので、つい涙が出そうでした。

小田村先生はじめ、国文研の先生方、岡先生をはじめ講義された諸先生方、本当に本當に有難うございました。

(玉川大学 文 一年 二井康雄)

## 三―四時間睡眠の四泊五日

この合宿で初めて心の開かれた思いがいたします。昨年の桜島合宿くらい幾度か合宿を経験してまいりましたが、いままでの自分の行なつてきたことが全くうつろであつた、卑怯であつた。本物でなかつたということを中心にしみて感じました。本當に進んでゆくべき道が体得できたような気がいたします。心が洋々と広がる喜びを感じます。班長という役を勤めながら、一人の人すら心を尽くして思いやることのできなかつた自分の、心の固さを深く恥じ入るのであります。面目は自分でつぶすものだ、赤恥をかかねばだめだと人に訴えていた自分が、本當に面目をつぶす体験をしてなかつたということを経験して、全くがく然とする思いです。

班長会議の時、小田村先生から、君は一人一人の言葉に真剣に思いを尽くしていますかと問われ、胸の内が恥ずかしさで熱くなるのを禁じ得ませんでした。自分が自分にとらわれていた、友に対して真心をもって接していなかった、一瞬々々をおろそかにしていた、なんと情けないことだろうか。これがわかった時、私は心の静かに広がってゆくのを、暖かくなつてゆくのを感じた。

木内、岡、花見、小田村先生、その他大勢の先生方がこの一瞬々に語られたお言葉は二度と聞くことはできない。そのお言葉の響きを二度と感ずることはできない。それを思うと、その響きがだんだん思い出せなくなつてゆくのが淋しくてたまりません。特に岡、花見先生にはもう二度とお会いすることができないかもしれないと思うと、そのお顔の印象が薄れてゆくのがとても淋しく思われます。そして、この合宿で奇しくも知り合った友が去つてゆくのが淋しくてたまりません。友に教えられ、鍛えられ、磨かれたこの五日間は、終生忘れることができないと思います。本当に大切なものが初めてわかりました。

考えてみれば、三、四時間の睡眠という、普通では想像もつかない生活の中で、ますます心のさえてゆくのは、合宿生活の尊さ以外の何物でもなかるうかと思えます。これまで諸先生方のおっしゃつておられた快い疲れを、いま初めて体験し、すがすがしい気持であります。

### ひたすらに心を鍛えよう

岡先生のご講義を聞かせていただいた時、心の洗われる思ひでした。「自分は昨年の桜島合宿から今日まで、何もわかつていなかったのだ。ただばくぜんと感動していたにすぎなかったのだ」。私はただただ今の日までの自分が恥ずかしかった。これから一年間、次の合宿までこの感激を持続するには、一生懸命勉強しなければならぬと決心いたしました。

### 新しく目ざめた

一口にいつて、自分はこの合宿で新しく目ざめた感じがします。自分はこの合宿にくるのに、みんながいつていたような、何か新しい物を感じ取ろうとする情熱に欠け、先生や先輩からすすめられたからきたに過ぎないのだ、という気持が心の底にあつた。

はじめの三日間は、自分は本当にまじめに先生の話を聞き、班別討論をしていたつもりでした。しかし自分の班の中で特別に別の存在であることが自分ながらよく感じられ、先生方の話にも本当に感動を受けず、たださびしくて自分で悩

んでばかりいた。

二十二日の夜、和歌批評が終わり、皆熱心に討論しているが、自分はなぜかむなしくさびしかつた。だがその夜、班長が本当に僕の身を思い考えてくれていたことがわかり、はっきりと自分の欠点に気づくことができた。こうして次の日の花見先生の講義の後の討論の中で、本当に自分と他の人の心が通じ合い、ただられしかつた。この時から本当に自分は感動というものを覚えることができるようになった。

自分に欠けていたのはまごころ、感動であつたこと、班長さんから強調された聖徳太子の憲法第十条の「怨を絶ち、瞋を棄て、人の違うを怒らざれ」という言葉の中にある、つましやかな態度であつたように思われる。

今になって自分の生き方を見出し出したというような感じがします。  
(鹿児島大学 法文 一年 工藤一巳)

### 人の心の美しさに打たれた

恐しかった。己の心がこんなに変わつてゆくとは。

たった四泊五日で一年分以上の講義を聞き、一年以上考へ、これほどまでに心が変わり、汚れきつた肉体が、精神がたとえられぬほどに清くなるとは。

だが恐しい。成績の下がることの恐しさは知っている。若者が急降下で不良化するのを知っている。

知らなかつた。人の心がこんなに美しいとは。町を歩く娘よりも、鉢の花よりも、真珠よりも美しいとは。政治家が、評論家が、学者が、教育者が、学生の心がこのように通いあうとは。勇気がこんなところから湧くとは。知らなかつた。己がこんなに進歩しようとは。恥ずかしい、いままでの己が。  
(福岡大学 工 二年 江口研治)

### 人間愛のある人になりたい

玖村先生のお話を聞いて、私は生きることの喜びを感じました。人間は作られるものではない、自分で作るものである。

玖村先生も、学長になられるまでに数多くの壁に直面されたことと思います。そこで僕は、先生が学長になられた努力のあとを学ぶべきことを痛感しました。

教壇の上で学生たちに、ご自分の気持ちを教えておられるにこやかな態度。僕はほんとうに先生のような人間愛のある自分を作りたいと思います。

最後に、いままでの自分の気持ちの小ささを教えていただいたことを深く感謝いたします。

(法政大学 法 三年 関 邦雄)

## 学問する苦しき

心に不安と希望をいだきつつこの合宿に参加させていただきました。合宿教室が終わろうとしている現在、なぜこのよきな会があることを少しでも前に知ることができなかつたかと惜しまれてなりません。これまでの自分の行動、生活がその根本からまいったくていかなかったことを深く感じます。

いま一度まなこを閉じて思いかえずと、師の心からの言葉のかずかずが僕の心を打つのです。古くから多くの先輩は世界に独得な日本文化を創造し、受け継ぎ、発展させてきました。それが現在、絶えようとしているのです。その文化の真髓が、多くの日本人の心からいままさに失われようとしている現状を、心から憂えていらつしやる師のお言葉に触れ、胸のつまる思いをしました。学問する道がいかに苦しいものであり、真剣に生きることがどれほどむずかしいものであるかを感じさせられました。

「脚下をみよ」といわれましたことは、私たちに最も欠けている点を指摘していただいたことで、浅薄な考えで前後を見つめず進みがちな私たちの心に反省を与えてくれました。本心に心の底から出てくるようなお言葉の一つ一つが僕たちを引きつけ、いつまでも僕たちの心を離しません。

今はただ感激でいっぱいです。この感激を忘れることなく

いつまでも持ち続け、多くの友らとともに進んでいきたいと思えます。  
(鹿児島大学 文・教 二年 中西勝義)

## 日本の情緒を身につけたい

真の日本人になるためには、古典を原文のままて読み、その著者と「尚友」しなければならぬ。真の日本人とは、日本の高尚なる文化伝統を持ち合わせた人間であると思う。

現実を目をやると、国民のほとんどはアメリカ的教養や物質主義に染まり、レジャーやバカンスなどの物質的快樂に酔っている。いまの日本にとって大切なことは、日本の情緒を持つた同志をふやすことが第一であると思う。

岡潔先生が特に女性にといわれたのは、そのことである。野蛮低俗なアメリカ文化に一番害されている女性をして、次の時代の子供を育てる女性の目を開かせることが大切であると思う。日本が太平洋戦争に突入した原因の一つには、国粹主義を日本の情緒と考える者のみがふえ、真の日本の情緒を持った、教養ある婦人が少なかったことがあげられると思う。まじめな意味で女子中学か女子高校の教師になりたいたいと思うけれども、まだ心の一隅では教師なんか馬鹿らしいという気持ちもある。祖国日本のために、生命と引き換えに日本文化を、日本の情緒を守る人間になるよう全力を尽くしたい。

(長崎大学 学芸 二年 白井 孝)

## 視野の広い日本人になりたい

私が合宿教室に参加した目的は、諸先生方や、各地から集まってきた大学生の長所をできるだけ吸収しようというところにあります。でも何ら心の準備もなく、ごく単純な気持ちで友人に誘われるままに初参加しました。

諸先生方のりっぱな講義や、友らの心あたたまる討議に接して、私の生き方やものの考え方があまりにも狭く、自分だけのことに捉われていたことに気づかされました。私が経験したことや知識がたった四泊五日の合宿で根底から揺さぶられて、これまでの私という存在が完全にくずれ去って、心は傷つき敗北感に打ちのめされてしまいました。この敗北感は今までかつて味わったことがありません。私はこの敗北感から奮いたって、この心の傷つきを何年かかってもなおしてみせます。

(日本大学 商 三年 森川哲也)

## 「情」について知った

この合宿で、私は自分の弱さを、つくづく感じさせられました。情というものが、人の心のうちで、どれだけ大切なものかを教えられました。

今までの私は、情というものに対して真剣に取り組む態度

に欠けていました。それどころかそういう態度は、かえって自分の心では軽蔑してしまふような気持ちもあったのです。そしてその方が得であると考えていました。こんな態度で人が動くわけはない。そう知ったのです。

これからは自分の心に忠実になりたいと思います。そして勇気をもって自分の悪(小我といつていいかもしれません)と戦おうと決心しています。

(京都大学 法 一年 松沢嘉彦)

## 真の友情とは

合宿の申し込みをした二日後に参加証と合宿の日程表が送られてきた。日程表を見た時、あまりにもきびしい日程なので「しまった」と思った。こんなにきびしい合宿なら申し込まなければよかったと思った。

しかしいまは違う。参加して本当によかった。岡、花見、木内の三先生ほか諸先生方のいわれた言葉によって、半信半疑で参加した自分のおろかさを知り実に恥ずかしかった。班別討論において、見知らぬ学生同士が初対面という壁を越えて話し合うという純真さも実に気持ち良かった。四泊五日を共に語り過ごした班員の友らではあるが、真の友情は通わなかったことがあったかも知れない。しかし私は、その姿勢から、これから求める友の選択方法を見つけたのである。

## 和歌創作の喜び

以前私も大学での真の心の触れ合いということが大切だと考えていたが、いまそれが一段と強く感じられる。五日間の短い合宿生活で、私がこれまで感じたことのない心の触れ合いができた。班別討論での、友の鋭く私の胸をついた言葉に私はじっと友の目を見つめた。友は遠慮会釈なく私の胸のうちをえぐりだす。その時、私を包んでいた小さな殻も自然と破れて行くような気がした。

これまで私は和歌をつくったこともなかったし、興味を持つたこともなかった。それが今では上手にはなれないけれど創作の楽しさが湧いてきたことは、自分自身不思議である。そこにはやはり和歌というものが、人間の心の何かを直接にありのままえぐり出すことにあるのかも知れない。和歌を作るといふ喜びはこれからもずっと持続させていきたいし、また今以上に喜びを感じるようになりたいものだと思う。

(九州大学 工 二年 武田正義)

## 帰宅したら大いに勉強を

私はこの合宿に参加する前二度小合宿を経験しました。そ

の時の経験は決して一点の曇りのない印象をもって終わった訳ではなく、非常な感動の中にも、まだ自分の殻から抜け出せない小我の存在を否定し得ませんでした。それは帰った後強い劣等感となったり自己嫌悪となったりで、この合宿へ来る気持ちは少し重荷だった。合宿一日目もそのような状態が続きました。だが二日目となってから自然に自分の殻を破れました。先輩諸氏の影響によって、そして僕自身の発奮と努力によって。

「勇気も、大きな伸びやかな心も、率直に正確にものを言う、という姿勢から生まれてくる」ということを実際に体験し自信が湧いてきています。

第二に諸先生方の人格に接して、学問というものの本質を知ったことです。僕は学問とは生命を実感すること、その生命を最高に生かすものは、誠であること。そして誠を尽くすことが人間の行動の中心になればならない、と思えます。諸先生方のお言葉に納得できないことも多くあって、僕の心の中で不燃焼のままに残っていますが、帰宅したら吉田松陰と夏目漱石に取り組みたいと思っています。

(熊本大学 法 二年 松本義則)

## 心にともしびがともされた

本合宿は、本当にすばらしくありがた集いでした。感謝

申します。来年は機会があったらきますというようなことは申しません。一人でも二人でも多くの友を連れてぜひ参ります。

私のひ弱い意志がキリツと引き締った感じがいたします。人間は相手に向かっては思いやり深く情け深くなければならぬ、自分の意に反すると思つたら、思い切りぶちあたつてゆくといいことは、よほど自分自身が心して学び思考したのちできることであり、今後は物事をじっくり考え、学び、自身の主体性というものをつかみ、今後の自分の生き方、つまり思想生活をしてまいりたいと思っております。

「死すること帰するが如し」と岡先生はいわれました。それが日本男子の情緒であるとお言葉を聞き、私の胸にもしびがついた感じでした。死ぬことが懐しい所へ帰つてゆくような日本人になりたいと強く感じました。

(鹿児島大学 文・教 二年 徳田浩士)

### 松陰先生と同じ日本人だ僕も

いまからふりかえると、合宿での五日間のさまざまのことが、頭に浮んでくる。けれども、僕自身に関しては、この合宿は、玖村先生のお話を聞いて、うれしくて、うれしくてしようがない、という一語に尽きる。松陰先生と同じ日本人に生まれた喜びで一杯である。いままでの合宿では、本当に感

動するということがなく、淋しかったけれども、今年は本当に「きてよかった」と、しみじみかんじた。班の友達もはじめは、どこまで分かってくれたかという点について僕は悲觀的だったが、大体、みな、分かってくれた。合宿を終わつてみて、もう、悔いはない。これから、しっかりと勉強していかうと思つている。

(九州大学 医 三年 古賀 誠)

### マルキシズムと対決せん

短い、そしてまた、つたない文章ですが、感想を述べさせていただきます。

私は、木内先生と同じく、マルクスがその著書「資本論」で述べたマルクス主義は、既に死滅してしまつたと、固く信じているのでありますが、それゆえに、マルクス主義者の活動を安易に考えすぎていました。今日の事態は、そのように生やさしいものではなく、進んで対決していかなければならぬ、ということを諸先生のお話を聞いてひしひしと感じました。今日までの私の逃避していたようなずるい態度、弱き態度を大いに恥じ、真剣に取り組んで行きたいと思っております。

それが、岡先生のいわれる日本の情緒を、末永く守り続けてゆくことにもつながるからだと確信するからです。

(佐賀大学 文理 四年 楠田幹人)

## 人生をいかに生くべきか

僕はこの合宿に参加して、自分がいかに甘かったかを強く反省させられました。本当のものというのは、いかにきびしいものであるかということを知ったのです。

ただ、不勉強のため、講義の内容や、先輩の言葉を十分理解することができず、自分の意見を卒直に発表することが少なかったのを残念に思います。得るところは、他の人よりも少なかったかもしれないが、やはり相当に勉強したように思います。諸講義や、先輩の言葉は、いずれも人生いかに生くべきかの重要な指標となる言葉ばかりでした。それに、この集いは、なごやかななかにも非常に真剣さがこもっていて強く心を打つものがありました。

本当にこういう機会に恵まれた自分を幸いであると思いません。今後ともこの感激を忘れず努力してゆくつもりです。

(東京工業大学 理工 一年 内田巖彦)

## 真剣さに驚く

私は、自分自身いつも、先輩、後輩が友だちとして大いに討論しあつたりできるといいなあと思っていました。しかし友だちとはいっても、そこには、目上の人に対する尊敬と、

教えを乞うという真情が盛られていることは当然です。こういう私の願いが形となってあらわれた。この合宿教室では、初めて会った学生、先生たちが、ずっと前からの友達であつたように話しあっているのです。自分の心を聞き、自分の考えや、悩んでいることを話しあっているのです。私は、この合宿は初参加ですが、みんなの真剣さに驚き、また、喜んで班別の話し合いにひきづり込まれてしまうのを感じました。

しかも、「切磋、琢磨」して自分を鍛えることは、若い時は勿論、就職して社会人になつても大いにやりたいと念願してやまない。私も、まことに微々たる力ではあるが、国文研の隆盛繁栄のため、努力を惜しまぬものの一人である。

(鹿児島経済大学 経 二年 若松三郎)

## もつともつと真剣に考えよう

ここにきて考えるということ、自分の意見をもつことがいかにむずかしいかを痛切に感じました。これからは、もつともつと真剣に考えようと思う。また行動においてもしかりです。

人間にとって心の豊さ、情緒の大切なことがよくわかりました。

(神戸大学 工 三年 常陰武良)

## 魂のふれ合う人間に

この合宿に期待してきた魂と魂の触れあいには、自分が至らなかつたために得られずに終わってしまった。来年は魂のふれあうような人間になつてきたいと思ひます。

国文研の目標は、日本の伝統に即した学問をやつてゆくことにあり、日本的情緒に帰れということを自覚しました。そういうものを求めてきた人々が、礼儀作法や、挨拶、聴講の態度などが、なつていないものがいたことを大変残念に思ひます。

(亜細亜大学 三年 奥田 栄)

## はじめて聴いたすばらしい講義

全く表現のしやうをしらぬほどの感動をうけました。私の大学入学の目的はもう少し人間的な人間になりたいというところでした。入学して四ヶ月も過ぎたのに、その糸口さえ何一つ見つけ出すことはできませんでした。単なる知識の吸収、知識の寄せ集めだけが学問としての体系をなすものであるというふうには私の考えは傾きかけておりました。しかしこの私の結論はなんら私を満足させてくれませんでした。またそれはいけないことだという事も漠然とは知っておりました。た

だ何故いけないのかはつきりと自分に説明がつきませんでした。今度初めて、学問の全ての下に横たわる精神というものが、いかに学問を左右するかということがわかつたような気がいたします。

全ての先生方がいわれる言葉の中に、ある共通する点がありました。この共通するものこそ、私のこれまで求め続けていた人間らしさだったのかも知れません。この人間らしさを求め続けることにより、すべての学問が成立するのだということがわかりました。本当にこんなすばらしい講義を聞いたことはありませんでした。私も松陰先生がたつたの半年位であんなに偉大な人々を何人も養成されたことがわかるような気持ちになります。

今後の学校生活に、また社会生活においても、今日までの四泊五日の体験を生かして、自己修練して、世の中のため、日本のために働らきたいと思つております。

(鹿児島大学 工一年 泉 和人)

## 内気な僕であつたが

先輩に紹介され、参加しようと思つてはみたもののここにくるまで非常に不安でした。一緒に参加することになつていた友だちが家庭の都合でこれらなくなり、自分一人になつてしまつて、全く知らぬ人たちと果たしてうまくゆくのだろうか

かと、内気な僕はとても不安でした。それがどうしたことか、その日の夕方にはもう仲良くなり、なんでも気軽に話せる友だちになってしまい、それまで全く見知らぬ人達とは思われぬほどなのです。内気な僕にこれほどうれしきことがあるのか。二日目の朝、一人で散歩に出た時のすがすがしさは何んとも言えなかった。やっぱり来て良かった……とうれしくてたまらなかったのです。

そして木内先生、小田村先生を初めとする諸先生方の心のひきしまるお話しに、僕はいまだかつてなかった感激を覚えしました。また岡先生のあの確固とした態度はまさに「確乎として抜くべからざる……」という感じです。先生のおっしゃる「日本の情緒」なるものもわかるような気がします。昨夜の玖村先生の吉田松陰の話の中に「……人読まず。即ち読むとも行わず。」という言葉があり、中学校の時の校長先生がよくいわれた「知っていても行なわざれば知らずと同じ」という言葉を思い起こしました。この合宿でいろいろと得る所がありました。この言葉のとおり、実行に移していきたいと思ふのです。本当に僕の人生の転機となり得る意義深い合宿教室でした。

(大阪経済大 経 学 二年 南 修)

### 聖賢の心に初めて触れた

初参加の僕は全日程真剣であった班員の方や講師の方々

に、初めに不真面目な態度でこの会に参加したことを心から恥じるとともに、お詫びを申しあげたいと思います。

しかし、そんな私の態度でも、多くの得るところがあったといえることを心より感謝します。

初めての和歌の創作であったけど本当にいいことであると思ひ、また今後もわからないなりに作っていきたいと思ひます。さらにまた多くの聖賢の心にわずかではあるけれども、諸講師によって触れさせていただいたことをうれしく思うと同時に、今後は勉学に精を出す決意です。

良き多くの友を持つことができ、すつきりとした気持ちで、魂の叫びを胸に、また友への良きみやげ話を胸に、わが家へ帰れることをこのうえなくうれしく思います。

(熊本商科大学 商 三年 米田隆司)

### 和歌創作を続けていこう

班長という責務にこうでいして、何かをいおうとしてもすれば背伸びをしてしまい、心がふさぎどうしようもなくなくなるのを何度か経験しました。

そんなことで、班員との心の交流を妨げ班員の方々に重苦しい思いをさせたのではないかと申しわけない気持ちです。

同時にどんな小さなことでも心を統一し、正確に自分の気持ちや意見を述べるのがどんなにむずかしいことであるか、また

そうしたことができたとき自分の心が晴れやかになるのを、身にしみて経験しました。

岡潔先生は、いまの日本人は悲しむべきことを悲しむことができなくなっているとおっしゃっておりましたが、その言葉が何か自分にもあてはまる思いがしてなりません。

物事の判断はどちらが正しいという以前に、自らの心のなかに悲しむべきことを悲しむべき、柔軟な心を練りあげるということがいかに大切であるかを感じました。

学校へ帰ってからは和歌の創作を必ず続けてゆこうと決意しております。  
(亜細亜大学 経 三年 岩越豊雄)

## “利”を求める生活への反省

まず最初に、第十回合宿を主催された国民文化研究会の先生方、会員の方、班長、副班長の方々に「有難うございました」と心から感謝の言葉を言わせていただきます。

毎日、「利」を求める生活を送ってきた自分を、今反省してみますと恥ずかしくなりません。今度初めて合宿に参加して心を打たれたのは、ここに集まっておられる皆さまが、こんな今まで日本の現状を深く思い、憂えていらっしやるのか、ということでした。僕は平和というものは戦争なき状態だと思っていたのですが、先生方からそういう平和はたいして価値のないものだということを指摘されて、今までそう考

えていた自分が恥しく思われてなりません。今度の第二次大戦で我らの同胞が数多くなくなりましたが、あの人たちは日本に真の平和がくるように願って死なれたことを思うと、その大きな犠牲を無駄にしてはならない。そうしてどうすれば良いかと考える時、まず自分が日本の現状をもっと真剣に憂えるということから始めなければなりません。そして、それに気がつかない無関心な人々の目を開けさせてやるべきだとそう思いました。  
(西南学院大学 経 二年 村山勲男)

## 抱擁力のある人になりたい

僕も日本人の一人として、喜び、怒り、楽しみに対し心を豊かにめぐらすことができるのに、その感情をありのままにあらわすという大切な心の働きを忘れていた。僕は自らその宝を鈍らせていたことを悔い、今後は思う存分に心を働かせ、磨き上げ、格調高き日本人本来の心をとりもどさなければならぬと痛感した。

さらにお互いに話し合わぬまでも、なにげない一挙手一投足のしぐさ、その姿も人の心を揺り動かし、何物かを訴え、感動を呼び起こし、慈しみのある態度は見知らぬ人にも親しみを感じさせることを知った。僕もこのような何ともいえない抱擁力を持った人間になりたいと思う。

(東京理科大学 理 三年 高野 治)

## 班別討論での感激

初めての合宿教室に参加して、到着するまでは四泊五日の期間が本当に長いような気持ちで、その間にどのような困難が待ち構えているかと思ひ、不安な気持ちでいっぱいでした。

しかし、いざ最終日程に入ると、大変短い期間でなんだかまだ物足りなさを感じます。それに初めて知り合った全国各地の学友と、もはや別れるのかと思うと目頭が熱くなつてまいります。

四泊五日の日程をふり返ってみると、岡先生はじめ諸先生方のご講話を聞いて胸の引き締る思いがしました。初めての参加で内容もよくわからずに、あさはかな態度でいましたが、一人一人の先生方のお話を聞いて自分はいったいこの年に至るまで何を学んで来たのか恥ずかしい思いがしました。この全国学生の集いに参加して、自分という者がなんとなく言葉に表現できませんが、目覚めてきたという感じがして非常に嬉しいです。とくに班別討論で学んだあの感激は、生涯忘れられない思い出です。本当に有意義な五日間でした。これをきっかけにいつそう努力して自己鍛練を行ないたいと思います。

(鹿児島経済大学 経 三年 今別府 勉)

僕は天皇陛下をおまもりする

二日目の夜の班別討論のとき、私たちは黒上先生のご本を輪読いたしました。そしてこんなにもりつぱで美しい精神が、千年以上も前から日本に存在していたのを知って、私たち一同深く感動しました。

日本という国がこれから先何年続くかわからない。また日本人が、自分の国の精神を忘れてしまう時がくるかもしれない。たとえそんなことになつても天皇陛下さえご健在であれば、日本精神は亡びてはいない。そういう意味でも私たちは天皇陛下を守り、大和心を子々孫々まで伝えてゆくのは、われわれ日本人以外に誰もいないということです。

しかし残念なことに、いまの世は戦前と戦後というふうにはつきりと世代の断絶ができてしまひ、それがますます大きくなるうとしています。それは「あなたがたのような人はいまだきの若い人に珍しい」といわれることからわかります。こういう悲しむべき世代の断絶を、これ以上大きくしないことが私達に課せられた仕事だと思つております。

(長崎大学 経 三年 森重忠正)

心の琴線にふれた

まず最初にこのすばらしく、また楽しく、なおかつきびし

い合宿を催して下さいました国民文化研究会の方々および講師の皆様、そして班の世話をなさって下さった班長・副班長の方々に心から御礼申し上げます。

私も東洋の美しき国日本の一人の市民として生まれ、眞の日本人として恥ずかしくないように考え、行動したいと思つていたが、いまだそこに至らず残念に思つておりました。今回の合宿に参加して何か糸口を見つけたような気が致します。この糸口をそつと大事にたぐつていきたいと思ひます。またいつかそれがもつれたときは、必ずやこの会がほぐしてくれるものと期待しております。

諸先生方のご講義には我が意を得たりとボンとひざをたたくのもありましたし、またどうかと不本意な思いをいいただくもありましたが、しかし一人一人が日本人として真剣に物事を考えていらつしやる情熱が何か私の胸に響き、心の琴線に触れるものがありました。私はこれを大切にして、これからの自分の人生のしおりとしていきたいと思つております。

(九州大学 法 二年 脇坂佳秀)

### 他の友だちにもぜひ知らせたい

五日間寝起きをともししてきた友と別れるとなると、何だかさみしくなる。五日間はあつというまに過ぎてしまったが、その五日間は僕の今までの人生を通じ一番張りのあつた

日々のように思う。

合宿参加の動機は、大学生活ではまったく専門にばかり偏つてしまい、人間形成のようなものはまったくなされず、これでは自分が完全に偏つた人間になつてしまふのではないかと思つたためである。

初参加の合宿で特に感じたことは、岡先生を初め講師の先生方、大学教官有志の方々、そして国民文化研究会の先生方の大変熱心なのにまったく感動してしまい、このような会を催して下さいたことに対して感謝にたえません。

先生方の日本の将来に対する真剣な態度を見てみると、いままで自分が全然そのようなことをすこしも考えていなかったことに気づき恥ずかしくなつてしまい、このように熱心な人がいるなら私も今後は日本の将来について真剣に考えなくてはいけないと痛感させられました。

われわれの世代の者は戦後の教育によって古文をまるで読めなくなつてしまつてゐる。同じ日本人の書いた偉大な書物を読めないとは、何と情けないまた悲しむべき事実ではないでしょうか。外国語は教えるが、日本の本當の言葉を、外国語と同じ程度ならまだしも、ほとんど教えられないということとは一体どういうことでしょうか。

このような会を僕たちだけのものにせず、もっと他の友だちにぜひ知つてもらひ、そして参加してもらひたいと思ひます。

(東京理科大学 理 三年 野口 清)

## 日本人としての使命感

自分はこの合宿にくるずつと前から、民主主義でも、共産主義でも、国民がよりよい生活を暮せるようにするものだからどちらでも良い。ただ共産主義の方が早く達成することができるから良いのだというふうに考えていました。

しかしいろいろな本を読み、自分として共産主義の悪い面を見せつけられ、また日本の保守党の現状などを見て、自分としては何をどうすればよいかわからなかった。

そんなところへ知人から、人間としてまた日本人としてどのように生きなければならぬかという、このような合宿があることを聞き参加したわけです。

まずこの合宿にきて感じたことは、友らと先生方が真剣に日本の情緒に生きたま学んでいることを知り、これが根本的なものだ、今までの自分はただ物質的なことばかりに気を取られ、日本人としての自分に目ざめていなかったことに気づいたのでした。天皇制についても、あってもなくてもよいものだと思ったり、そういうことを考えるのは、その人間が第二次世界大戦以前の軍部のように成りたいのだから、天皇制は良い結果を生まないものだというふうに考えていた。

しかしこの合宿ではじめて日本人と、日本文化の中心であり、日本歴史の根本である天皇をなくするというようなこと

は、日本という国を否認しようとするものであることに気づきました。

これから自分は日本人としての使命感を持ち、生死を考へ、自分の後からくる友らにもこのことを気づかせ、日本をよりりっぱな国にしていきたいと思つた次第です。

(駒沢大学 商経 一年 柳川正治)

### 一抹の不安で班長になったが

私は今回で二回目の大合宿を経験したことになりました。去年の桜島合宿において初めて、日本人としての自覚に目ざめさせられました。それにもましてこの城島合宿は私にとって忘れられない感動と体験とを与えてくれました。初参加の気持ちを持続して、諸先生方の心身から湧き上がってくるありがたいご講義を拝聴させていただきました。

今度の合宿は班長という身に余る大役を課されて、合宿前は一抔の不安を抱いていたのですが、班に集まった学友は皆仲よく真剣に取り組んでもらえたので、私も班長ということ忘れて、本当に友らの中に入っていったことをまことにうれしく思っています。良き友も少なからず見出すことができました。

このような経験は、必ずやこれまでの「私」という人間を進歩向上させる力となると思います。これらの尊い機縁を基

盤にしてこれからもますます勉強したいと思っています。

山鹿素行、吉田松陰先生など多くの先師とのつながりが私の身にもあることを実感できて、日本人であることをつくづく感じました。学生生活に励みたいと思います。

(鹿児島大学 文理 三年 藤崎義之)

### 言葉に尽くせぬよろこび

合宿を終えるに当たりましての私の気持ちを一言で申し述べますならば、この数日間を通じて、自分の周りの目に見えぬラッキョの皮のような薄い皮が一枚一枚はがれてゆくような気持ちであります。

この合宿は全国の友らが学校や年令等の相違を超越して研鑽する場ですが、ここでこんなにも相互の意志の疏通ができたことは、言葉では申し尽くせぬほどの喜びであります。この体験、この実感が「国民同胞感」であると感じます。

今後ますます全国民とともに真摯な活動に精進すべく覚悟を新たにしました次第です。

(玉川大学 文・教 一年 益井重征)

### 「右翼」だとのうわさで不安であったが

私は本当に合宿にきてよかったと思います。来るまでは兄

や友人たちにいろいろいわれましたが、一番気にかかったことはその中に「右翼学生」を育成する所だという意見のあったことです。これには私は不安になりました。しかしその時は申し込んだ後でどうにもなりませんでした。それで私はまあ行ってみるだけ行こうと思ひ、参加しました。しかし、いま合宿が終わるに当たり自分の考え方が恥ずかしくてしょうがありません。私はこの機会によつていままでの自分ではないように感じます。これだけでも進歩のように感じます。

私は生まれて初めての経験であるこの合宿において、これほど有意義に過ごせたことを小田村先生はじめ諸先生及び講義をなさって下さった先生方に深く感謝いたします。でも唯一の残念で情けないことは、班別討論等で私が殆んど意見を吐かなかつたことです。この点につき、班長さんならびに班員の方々に申しわけないと一言おわびいたします。これから私は明日を信じてそれに向かつてすこしでも世の中をよくしていこうとする気持ちでいっぱいです。来年こそは友人を誘ってきたと思います。

(亜細亜大学 経 三年 阿部悦也)

### 忘れられないひと言

岡先生はご講話の中で今後の教育のあり方について、「情意の発達を促すこと、人の心がわかる、とりわけ人の悲しみ

がわかることが大事である」とおっしゃった。人の心、とりわけ「人の悲しみ」がわかるような人とは一体どういうことなのだろう。このことばがひどく心に残り、いまはこのことで頭がいっぱいです。「悲しみ」がわかるということとは、とりもなおさず人の「よろこび」をわがよろこびとすることができような人であろう。しばらくこのことをじっくり考え続けていきたいと思えます。

(早稲田大学 政経 二年 今林賢郁)

### 松陰先生の本をぜひ読みたい

私はいまだかつてたれの話しを聞いても感動したことがなかった。ところがこの合宿で岡先生や玖村先生のご講話を拝聴して全く心底から感動しました。この感動を持続させねばならない。日本の情緒とは何とすばらしいものだろう、いままで私自身考えてもみななかった。だが残念なことにはこれを言葉に表現できない、また友人に納得できるように説明できない、私に一つの課題ができてしまった。玖村先生は士規七則のご講義の中で、人となれ、日本人となれ、また己の進む道を知れ、と切実に訴えられた。帰ったら松陰先生の本をどうしても読まなければならない。

(鹿児島経済大学 経 三年 野中民生)

### 精神的な革命

私はこの合宿教室には初めての参加です。この四泊五日の合宿を通じて自分の心のうちに、まだはっきりはいえませんが何か強いものが残っているように感じられます。

班別討論にしても輪読にしてもあまり発言できませんでした。最初のうちは、自分の知識不足、勉強不足のためでしょうが、自分の心を一つにまとめることができず、すべてが何か空々しいもの感じられておりました。

しかし和歌創作およびその後の相互批評などで友の真心のこもった歌に接したり、心を開いた話などにわれ知らず引き込まれました。そして最終の晩になって初めて晴々とした心持ちで友の言葉を聞くことができました。そして全班体としてみんなの心が一つになってゆくように感じました。

また講義講話については諸先生方の切々たるお言葉に接し、これまで何とも感じていなかったことが切実な問題として感じられるようになりました。それは私にとっていわば精神的な革命のようにも思われます。

(九州大学 法 二年 三島 悟)

## 聖徳太子のお言葉「背私向公」

僕は初めてこの合宿に参加しました。合宿が始まったときはこれといった考えもなく、普通の合宿に参加したつもりでした。がしかし第一日目の講義がはじまるやいなや僕の心にびりっとしたものが感じられて、この合宿は安穩として過ごすことはできないぞと思いました。はたして聖徳太子のご講義の時、「背私向公」ということばの重大さが、まず最初に僕の今迄の気持を一洗するように心に響きわたりました。

諸々のご講義がありました。その中で特に感激したのは岡先生の「日本の情緒について」でした。日本の情緒とアメリカの情緒の違いを例をもってお話された時は、本当にそうだなあと思いました。

それともう一つは班別討論において、皆が日本の現状などを理解しよう理解しようとしたことが、僕には崇高なものに見えました。飾らず気取らず、自分の姿をありのままに投げ出す姿は、本当に立派で気高いものと感じました。

僕は班別討論のさい、自分が岡先生の気持ちはどう理解したかに関連して、母親の真心のありがたさについて話してきました。そのとき僕は母の心が自分の胸にまざまざとよみがえってきて男泣きしてしまいました。泣かないようにしようと思っても、とめどもなく涙がでてきました。この気持ちがきつ

と日本の情緒につながるものではないかと思われます。

(下関市立大学 経 二年 梅谷道明)

## 学園の友に訴えたい

私は初めての合宿参加ですがとにかくすばらしかった。実に多くのものを得た気がします。講義や討議が日程どおり次々と進んでいくうちに、友だちと次第に心からうちとけていくうちにこんなすばらしいものだったら、もっと多くの友だちを誘ってきたのにと惜しまれてなりません。とくに岡、木内、花見、玖村諸先生のご講義は「直感」と「情熱」にあふれたものと感じます。諸先生方が大局的なものの考え方をずばずばと話されるたびに、私の胸の内がすうつとなりまして。松陰先生の偉大な志を示してください、また日本の現状を憂えるお話を聞いて、われわれがいかに「骨抜き」になっているかを痛感させられました。

私はこれらの講義を全国の学生や青年に聞かせてやりたいと思っております。さし当たっては学園の友だちに訴えていこうと思っております。また班別討論において、最初は黙っている人が多かったが次第に意見が活潑になり、最後の夜はアルコールの後のせいとか、みんな激情にかられ、激しく意見を斗かわすうちに友の真情がわかり、泣きながら語る友に涙を催し、全員一体となって真剣に生きるといふことのきびしさに感動

してしまいました。

岡先生のおっしゃられたように、われわれはアメリカの弱体化政策により、骨抜きにされ、人の悲しみがわかる心、憂うべきことを憂う心が抜き去られたのかどうかはしりませんが、これほどの講義や色々の体験を持ったいまですらも、生命がけで国を守ることに生きていける自信が自分にはまだまだ欠けているように思われます。これは合宿後徹底的に内省していこうと思っっています。

(宮崎大学 学 一年 望月俊毅)

### 国のことを真剣に考えたい

とにかくこの合宿は「感激」の連続で私の胸は高鳴った。初参加の私を最も感激させ興奮させたのは合宿三日目の岡先生の講話でした。日本の情緒、人の中心は情である等の先生の一つの言葉は私の胸を熱くし、私は日本人であり、日本という国を真剣に考えなくてはならないということを教えてくださいました。これが私の率直な感想です。

(法政大学 法 三年 鈴木 弘)

### 合宿を去るのが残念だ

いま友らと別れるのが残念で、本当に心残りだという気がする。昨日あたりからみんなの心がやっと打ちとけたように

思われ、これから本当に心おきなく語れるような気がする。

自分は合宿の初めから心を開いて話し合うつもりでいたが、実際にはなかなかできなかった。つまりぬ自尊心につながるような優越感、どうしてもすなおになれない気持ち、引っ込みがちな気持ち等々のさまざまな感情とたえず闘ってきた。そういう気持ちを捨てて心を開き話し合うことが大切だと思いがら、どうしてもそれができなかった。

しかし現在は気持ちがやつととけたような気がするし、その気持ちは何よりも大切だということも痛感した。ほんとうにこの合宿に参加してよかったと思う。

今後私は美しいものを見ればそれに感動する、美しいものを美しいと思うその素直な心を持ちたい、またそういう方向に向かって努力したいと思う。先生方から聞かされた話についても自分がそれに感動する、納得するということだけでなく、実際にそれを行なっていきたいと思う。

また人の話を聞くことがどんなにむずかしいか、その人の心持ちになって聞くということがどんなにむずかしいか、またそれがどんなに大切かということもわかった。大の男が涙を流して話すというそういことがどんなに大切で、むずかしいか。そういう真剣な心をこめたような態度が必要だと思ふ。この合宿で問題にされたことについても、もっと一生懸命勉強してゆき、またいろんなことを経験してさらに一段と自分を磨き高めたいと思います。

### 班別討論の空気は恐ろしかった

他人の話す言葉に心から耳を傾け、その人の身になって考  
えることが如何に尊く、きびしいことであるかを初めて体験  
しました。

また議論と議論のぶつかり合いでなく、その人自身の人格  
に対して、偽わりのないことを話すということが、本当に聞  
き手を感動させるものである、ということをつくづく感じま  
した。

班別討論のあの雰囲気は私自身には恐ろしいものに感ぜら  
れました。そこにあるものは真心と真心、誠意と誠意のかわ  
し合ひでした。そうして自分を飾ることなく、真心をうちつ  
けていくことが、如何に美しくも尊いことであるかを心の底  
から感じました。(亜細亜大学 商 三年 山田健生)

### 強い人とは

強い人とは小田村先生のおっしゃられたように、梅一輪咲  
いて天下の春を知る人であろう。岡先生の訴えられたよう  
に、小我を捨てて真我に生きることのできる人だろう。玖村  
先生の説かれたように、唯己れを然りとするのみで、他と自

分を比較しているいろいろな人ではあるまい。

強いとは力みかえった態度を指すのではない。力みには何  
の強さも優しさもない。「日本の偉い人で優しくない者は一  
人もなかったですよ」との岡先生の言葉は、私の心を捉えて  
離さない。私はこの稀有の言葉を絶対に離したくない。

心が自由に働き、優しさを内にたたえ、しかもきびしく自  
分を見つめることのできる人を強い人というのだろう。こん  
な人になりたいと、この合宿の終わりに当たって僕は思っ  
た。(長崎大学 経 四年 内田英賢)

### 男が涙するほどの感激

最初のうちは本会の趣旨と私の抱いてきた考え方に違いが  
あり、講師の先生方のお言葉が心の真底のちよつと手前で通  
り過ぎてゆくようでした。

私はこれまで既成概念を固執することに終始してきました  
が、玖村先生のお話を聞き、自分の惨めさをいやというほど  
知らされ、本当に感動させられました。

理論や理屈でない。人がいろいろいつても自分で感じるも  
のがなければならぬ。それには日常生活においても真剣な  
態度が要求されるものと思えます。

吉田松陰先生のお言葉が自分の心を開いて下さった。男が  
涙するほどの感激です。

短歌創作のむずかしさ、言葉の選択と表現のむずかしさを  
かみしめ、終生「しきしまの道」を続けてゆくつもりでおり  
ます。

まだまだ書きたいことはありますが、自分の心のうちで  
感じたものをどのような言葉で言い表わせるかわかりませ  
ん。これからは、今後この感激を持續し、自らを練磨してゆ  
きたいと思います。

(防衛大学 三年 貝吹孝夫)

### 心のつながりを大切に

合宿で私が深い感銘を受けたのは、班別討論の心あたたま  
る話し合いです。

先生のご講義を開き、それに感激しなかったものがあるだ  
ろうか。ご講義に対する質問の中で、先生のお気持ちからか  
け離れたものもあつたが、それはわれわれが部分だけに執着  
して全体を吟味することを忘れていたからだったと思う。

班別討論でそのことについて徹底的に討議し、皆で反省し  
た。我々自身のいたらなさに気づき合い、涙を流しながら自  
分の気持を語った友の言葉を私は忘れることが出来ない。

わずかに四泊五日の合宿生活ではあつたが、皆の間には竹馬  
の友のような心のふれ合いが感じられた。これらの心のつな  
がり人が人の心を動かさぬはずはない。私は合宿の体験だけ  
に止まらず多くの学生たちに訴えていきたいと思う。

(鹿児島大学 文・教 二年 田淵勝次)

### 少しはわかってきた

この合宿の輪読で、班長さんから文字の読み方文字の大切  
さを聞かされ、また先生方の講義の中にもたびたびそうした  
ご意見が出されました。これまで自分の言語に対するあいま  
いさに気づかされ、言葉に対して真剣に取り組む姿勢がなっ  
てなかったことを痛感させられました。

この合宿において自分自身、班の仲間の人たちとじゅうぶ  
んに打ちとけきらなかつたのですが、自分の思っていること  
を心底からいうことのむずかしさを新たに認識して、真剣な  
姿勢になるためのいとぐちを講義や友人の言葉の中に見い出  
そうと努力した。

今ようやくちよつと位はわかってきたように感じますが、  
これからさき先生方のお言葉に真剣に取り組みたいと思つて  
おります。また一人人がいかに大切なものであるかを説き聞  
かされ、自分がふらふらしていたことを恥ずかしく思い、こ  
の合宿で聞かされた大事なことを胸にかみしめながら、今後  
自分の進むべき道を見出すつもりです。

(福岡学芸大学 学芸 一年 向山 晃)

## 全生涯を通じて考える

いままさにこの合宿が終わろうとして、城島高原を去って行こうとする私の気持ちを、心に浮かんでくるままに書きだした。

この合宿にくるまでの私には、過去二十余年の生活を通じて形成されてきた信念があった。私はこの信念によって生きていこうとしていたが、これまでに私の考えに賛成してくれる人はごく稀であった。

諸先生方の講義の内容に心を打たれ、今まで抱いていた信念がくずれ始めた。だがしかし完全に捨て切れないまま差別討論において発言した。これに対して班員のほとんどが批判を下し、班員の心を悲しませた。

このような体験は以前の私にはなかった。本当に真底から打ちとけて語り合おうとする多くの友らがいることを知り、私にきびしく反省する機会を与えてくれたのである。私にとって得がたい貴重な体験である。一ヶ月でも一年でもあるいは全生涯を通して考え抜き、日本人としての真の生き方を求め直さなければならぬと思う。

(神戸大学 工 一年 中木 繁)

## 卒業後も参加したい

私は確固たる信念も持たず、期待と不安をもって初めて参加したわけですが、合宿が始まり、先生方のお教えを聞くにつけ、また友だちの真剣な態度、言動を見聞するにつけ、安易な気持ちで参加して、傍聴者のような形だったことを本当に恥じる思いです。

まず最も痛感したのはこれまで安易な気持ちで過ごしてきた自分には、この合宿を通して物事に対して深く考え、又真剣に対処することが如何に大事か、そして玖村先生のお話にもあったように、義は勇に因りて行われ、勇は義により長ずとありますように勇気をもつていきたいと思えます。

このよき経験を生かして今からの生活に対処し、吉田松陰先生、また聖徳太子の書物等を研究したいと思えます。

最後に毎日が緊張と感動の連続でしたが、諸先生方のお教えと良き友らと親しく接し、語り得たことは、この上ない喜びで、本当に参加してよかったと思えます。

来年卒業しても参加できるようでしたら、大いに勉強してぜひ参加したいと思えます。

(鹿児島経済大学 経 四年 南 忠夫)

## 襟を正す気分

諸先生方や心ある友らとともどもに誠の道を求めながら勉強してきたこの四泊五日は、私には経験したことのない楽しく有意義な毎日でした。諸先生方の講義はその多くに感動し、共鳴しました。日本文化の伝統のすばらしさを強く認識させられました。なかでも、和歌の創作は意義あるものだと思います。三十一文字に自分の思いを正しく表現することのむずかしさと、それを表現し得るすばらしさをはじめて体験しました。また人の本性はその人の表情、態度、言葉などに如実にあらわれることも実感できたとともに、ここに集まってきた学生の一人々々が真剣にものごとを考えていることを知り、襟を正す気分を味いました。私はこの合宿で今後真剣に勉強しようとする意志を固めることができたことをうれしく思っております。

(鹿児島大学 文理 三年 中村紘昭)

## 思想とは心の姿勢か

合宿教室を終えたいま、ほっとした気分と同時に自分の心がどこまで友らの心の真底にはいり込めたかやはり不安な気持ちが残っています。この合宿中、班別討論等で友の真心

を、真心として受け入れ、素直に自己を表現することができただろうかと考えて、いろいろ反省させられます。

私はものごとを全体的、総合的に把握し、判断することに欠けていたためか、一人で突っ走る傾向があり、往々にして友の心を思いやる気持ちに欠けていたように思います。そのために、友の話している問題を正しく理解したつもりでも、その問題からはぐれたりして、友の心に真に触れ得なかったことが残念でなりません。

この合宿で、思想とは心の姿勢である、そして日本人の心の姿勢は日本の情緒に目覚めることである、ということを教えられました。私も今後、日本人として正しい心の姿勢を形成するよう努力するつもりです。私は今それをやろうという自覚と信念に燃えています。かくすることが、日本国家の建設へとつながっていることと確信し、日々研鑽してゆこうと思えます。

(九州大学 法 二年 春藤純生)

## 柔軟で強靱な心を鍛えよう

この合宿に参加するまで、幾度も迷いました。それはいつも「自分」のことを考えて、小我に捉われた時です。合宿中にも考え込んだ時があります。それはやはり小我に捉われた時でした。ほんの小さなことにこだわったり、人の心を知り、相手の人の苦勞やその立場を思いやらずに、自分の立ち

場からだけで物を考えたからです。これからも幾度もこうしたことを繰り返えしてゆくかもしれない。しかしその繰り返しが少しでも減ってくるように努力してゆきたいと思いません。

今度の合宿でうれしかったのは、和歌がわりあい素直に詠めたことです。この合宿で心の律動を取り戻せたことを大変うれしく思います。私も岡先生のいわれるように、リズムのある詩で心を整え、和歌創作によって素直にものを見たり感動できるような柔軟な心を鍛えてゆきたいと思えます。

(神戸大学 文 三年 寺川真知夫)

### 岡先生のお話で目覚めた

僕はこの合宿教室にきた時、押しつけ的と見えるようなやり方に大いに疑問を感じた。心を開いて話し合おう、という班長の言葉も、素直に聞くことはできなかった。そういうわけで班別討論は、僕にとってわずらわしく、また他人の話にはまったく興味が持てなかった。しかし、第三日目に岡先生はじめのしみじみとしたお言葉に接することができたとき、僕はじめて深い感銘を覚えた。先生は「君たちは日本人です。そして日本人は、日本人でなくては感じるこのできないものをもっているのです。そしてそれを感じたときには、感激をするものです。しかしながら、いまの日本には、そういう

ものがあると思えますか。いまの日本ではそれがしだいになくなってしまいつつあるのです。君たちは、もうそれがわからなくなつて、ただアメリカ的情緒におぼれてしまつているのです。」というお言葉を聞いた時、僕は恥しくなつた。今まで自分は、日本人だと思つていた。しかし日本人だと信じてはいなかつた。僕はこれからの生活目標を、初めてここに見つけた。日本人として生きること——考えてみれば、今ごろになつて、日本人が日本人として生きるということを初めて決心しなければならぬなどということ、実に恥しいことである。しかしながら日本人としての自覚を根底に持たないでいて、何を語り何を行なうことができようか。

僕は、僕が岡先生のお話に感動したその時から、友達に話しかけずにはおられない気持ちにかられた。僕の言葉は相手に伝わり、相手の話は僕の中に入ってくる。そう感じた時のうれしさは、言葉ではとうていあらわすことができない。

(亜細亜大学 商 一年 宝辺幸盛)

### 強烈な印象

日ごろ、友だちに向かつて、精神面の重要さを強調する僕が逆に、戸惑つてしまうほどの合宿に於ける心の問題の捉え方は強烈でした。私がかからの希求していたものが本当にこの合宿にあることを知り、これまでの自分の勉強や生活態

度について少なからず反省させられるものがありました。班別討論などで少々反撥を感じた点は、友らの言葉が本当に心の底からでているかどうかという疑問です。しかし皆が、国文研の先生方や班長がそういつていることは事実であり、本当にそう思っている人もいるのではないかと、いわれた時、自分が非常に小さなものに感じられました。

真の意味の「日本人の心」とは自分の思っているようなものではない。いや、自分の思っているものなど本当の「日本人の心」ではないのではないかと、思った時、無性に、むなししいものを感じました。この合宿を契機にさらに心の問題と真剣に取り組んで勉強してゆきたい。

(早稲田大学 第二政経 一年 飯高敏弘)

### 素直さと疑念との錯綜

合宿教室の日程行事の一つとして鶴見岳に登った時の印象深い出来ごとがいまも私の脳裏から消えない。それは、川井先生が、山を下りてきたわれわれに、にこにこ微笑をたたえながら「御苦労さま」とやさしくいたわりの声をかけてくださったことである。私はバスに乗ってから、本当に涙が出そうになった。こんな素直な気持ちもやや時が経つ間に薄れ、先生の情意を疑いだし、単なるポーズでわれわれわれに声をかけられたにすぎなかったのではなからうかという疑念が起

こってきた。このように疑念にとらわれだすと、人の真意、真心を受けとめられなくなる。こんな自分をだめな奴だと思うのですが、こんな自分を変えることはとてもむずかしい。しかし現在私の胸には噴き上げるような闘志は湧いてこないが、静かな張り切った気持ちが出ている。

(岡山大学 理 二年 菅 志朗)

### 数々の教訓

われわれは物質主義的なものや、表面的なムードに流されてしまう傾向がある。しかしそうした傾向を是正するためにも、合宿教室で学んだ数々の教訓を、ともども自分のものとして身につけてゆきたい。合宿では、自分の精神、心についてもっと考え直さなければならぬことを痛感した。

人間が、ただの機械のようになってゆく社会や、自由な選択をすることのできないような社会に、この日本をさせないために、もっと真剣に勉強してゆきたい。

(岐阜大学 農 二年 溝口 徹)

### 全国の友らの心を憶念しよう

私自身にとってこの合宿の一日一日はかつてない緊張の連続でした。心と心の激しいぶつかり合いを火花を、散らしたと表現しても、決していい過ぎではないと思います。それは

表面的な妥協を許さない人と人の心と心のぶつかり合いでした。私はこれまで人間関係とは表面的な妥協で成り立っていると考えていました。そのためこのような妥協を許さない合宿の一日一日に、精神的な苦痛すら味わわせられました。いま静かにふり返って見ますと、本当に爽やかな心の洗われた日々でした。こうした心の触れ合いがなくなると人と人との真の交流はありえないということです。

ただ私自身いかにこの緊張を持続していくかが問題です。緊張のあとにゆるみがあるのは人生の法則ですが、私は全国の友らの心を絶えず憶念しつつ、緊張と弛緩を越えてやってゆきたいと念じております。

(亜細亜大学 経 四年 永島 学)

「なるようになるさでは、いけなかった」

この合宿で痛切に感じたことは、自分は日本の現状についてあきれるばかり無知であったということです。学校の友人にしても田舎の友人にしても、ただ「なるようになるさ」といってしりぞけてしまうのに、この合宿には本当に真剣に日本の将来を考えている青年がいるのだと思うと実に頼もしく、また力強く思った。

自分はこの合宿の講義を聞いて、学校での一年分も二年分も知らされたような気さえます。自分も青年であり、大学

生活を送っている者として皆についてゆけぬわけではない。合宿での感激を学校に持ち帰り、友人に話してやりたいという気持ちでいっぱいです。この機会に自分の勉強が本当に足りなかったことに気づいたことは幸いだと思えます。

(法政大学 法 三年 堀江正憲)

### 既成概念からの脱皮

人間の人間たる所以を自覚し、日本人の日本人たる所以を自覚することが、自分にとって、またこの合宿に参加しておられる各人の結論ではなかったかと思えます。この自覚が将来の日本建設の基礎確立となることを信じます。われわれはこの合宿で学んだ諸先生の人間性や識見、友人の心からの叫びを、なんとかして日常生活に生かし、それを自分の英知と信念に高めなければならぬ。われわれは先ず何をおいてもこの考えを第一にしなければならぬ。

強制されたきびしさの中に自分を置く事は必ずしもむづかしくはないけれども、真に自分を自分で日本人たるきびしさの中に置くことはいかにむづかしいことであるか。これを克服してはじめて真の日本人が形成され、社会の発展に寄与し得る人格が備わると思う。単に知識を知識として口に出し、理論を理論としてのみ口に出す。そういう現代的なスマートな人間が充満している現代日本において、我々一人一人が既

成概念にとらわれずに、認識即体験の形で自分自身を鍛えてゆかなければ、このすばらしい合宿にただ参加したというだけに終わってしまうのではないか。

自分の人格、人間性を完成することが、社会の発展と国家の進運に寄与できることの根本的要素だと自覚し、それを実践に移すことが今合宿における主目的であろうと思う。私はそう信ずる故にこの時点から直ちに始めようと思えます。

(早稲田大学 政経 四年 鈴木陸三)

### 感動で終わらせたくない

合宿の目的もわからずに初参加した。しかしこの五日間の合宿を終えて、日本の将来のあり方、同胞的連帯感の養成、人生観の確立、心と心の触れ合いに言葉でいい表わせない何かを得た。それは充実した満足感でもある。

私は、まず自己をみつめ、自己確立への努力を傾けることと並行して、私の友だちに力強く働きかけたい。なんとしても諸先生のお言葉に感動したというだけで終わらせたくない。この感動を持続し実践してゆかなければならない。この合宿では、和歌の心に触れ、自己の心を素直にみることででき、本当にうれしかった。今後も合宿に参加し、ここで学んだ精神をさらに向上させ、自己を鍛えてゆきたいと思う。

(高崎経済大学 経 四年 広田耕一)

### 予測しなかった体験

私はこの会がこれほど私の胸を感激させてくれるものとは予測していなかった。この会にすれば何か自分に得るものがあるだろうという気持ちでした。そういつた軽卒な心が私の胸中にあつたことを反省しています。先ず自分が世の中のいろんな事を真剣にしかも情熱をもって考えていたかどうか、また自分に心の姿勢が欠けていたのではないかとつくづく、痛感しています。

これからは、この気持ちを自分の生きるべき指針として、生命のある限り努力する決意です。本当に私にとって是有意義な合宿教室であつたと喜び、また感謝しています。

(大分大学 学芸 四年 川村柴男)

### スタートラインに立った

この合宿にきた私の動機は、将来の自分が何をしたら良いかという確固たるものを見出すのが目的でした。いま合宿が終わろうとして先生方の一言一句を肌で感じ取ることができ、感激にたえません。すべてがこの四泊五日の合宿であらためてスタート・ラインに立たされ、これから各人各人がそれぞれの立ち場で考えてゆくように方向づけられたと思いま

す。

班別討論も初めての経験でしたが、これほどまで深く考えたことはありませんでした。また自分の無知が恥ずかしく発言することさえできませんでした。このようなことはスポーツ関係の合宿では到底体験できないものですが、この合宿機会に諸先生方のお言葉の真実にすこしでも近づくべく努力したいと思います。

(日本大学 法 三年 桜井郁三)

### 聴講の感激

この合宿で聴くことのできた岡先生、玖村先生の講話には全く圧倒されてしまった。

講話が終わって友人と「すごいなあ、よかったなあ」といって交わすだけであった。理論的になぜこんなに感激したかを話すのは現在でもできないような気がする。

講師の先生方の話し方、壇上の態度などから非常に心打たれるものを感じた。本を読んで感じた先生、人から聞いた先生についての話から感じていたものなどが全部吹き飛んでしまったような気がしてしよすがなかった。こんなりっぱな先生の話は一生聞けないような気がする。要旨をノートにとつたものを読み直したいと思う。

(京都大学 法 二年 井上慎一)

### 受け入れられぬものを感じた

このように自由に話しあえる場を与えて下さって、たぎるような情熱に触れさせていただいたことを感謝します。真理というものをよりよく教えて下さったことを感謝します。しかしこの国文研、大学教官有志協議会の将来を憂慮し、受け入れられぬものを感じます。それは柔軟心の欠如のように思われます。「いわゆる信念」と「真の信念」とはよく外観が似ていると思うからです。もうこれ以上は言いませんまい。なぜなら私自身いうことを実行するだけの境地にほど遠いことを感じているからです。この会の真の発展を心からお祈りいたします。

(東京大学 文 一年 長川達夫)

### 糸口がつかめた

今期合宿終了を間近に控えて何かしらしみじみとした喜びを感じます。岡先生、花見先生や玖村先生のお話を聞いているうちに自分が求めて得られず悩んでいたものがきわめておぼろ気ですが糸口がつかめてきたようです。

(九州大学 経 二年 片岡 健)

本気になって生きたい

自分という者が何と怠惰な不真面目な生き方をしていたかというのを——それを痛切に思い知らされました。

今後自分がどう進んでいくか——それは少し落ち着いて考えてみなければわかりません。そしてこの合宿の活動内容についての賛否は抜きにして、とにかく自分が人間として、青年として、もっと本気になって生きなければならぬということを感じます。それを教えていただきましたことを感謝します。

(東京経済大学 経 四年 竹本晃之)

微妙な点では意見が違うが

日本人固有の精神の欠如は、今日の日本の深い憂いであります。その点をきびしく突いてわれわれを心底からめざめさせ、また素直に自分の心を表現する訓練、心と心の触れ合い、心のあたたまるような友情のつちかいなど、まことに有意義な合宿を催されたことを、深く感謝します。

私は相当前から社会の動きに深い憂いを感じ、現在の社会に欠けている日本的なものを国民の心にめざめさせることが、すべてを解決する方途と思っており、いまにそういう運動が強まると(これは日本人の歴史と性格から)考えておりました。

た。

いまこうして私の期待にかなった合宿教室の実際に触れ、うれしく思いました。そして諸先生方のみ教えの一言、一言が強く心に残っています。しかし政治動向判断に関する限り、主催者方と微妙な点で意見を異にしております。でも、今後ますます自分の考えを深めてゆきたいと思えます。

(滋賀大学 経 二年 吉田博全)

小我の執着を踏み越えて

昨年の桜島合宿はそれまで形作っていたイデオロギーの崩壊——を通して、新しい学問の道を発見するという、一生を左右する大きな転機でした。この一年間の私の課題は学問に対する心の姿勢、どんな喜びを本物の喜びとして感ずるようになるかということでした。私はこの合宿を通して公に目を向けることを知りました。小我に執着する自分をその深みから救い出すこと、そこに見出だされる喜びこそ本物だという気がしました。学園に帰ってからもこの気持ちを失わず努力を続けてゆきたいと思えます。

(玉川大学 工 二年 原 正昭)

長い間忘れていたものがよみがえった

四泊五日、ほんとうに苦しかった。自分は今まで考うべき、悩むべき問題を回避してきた。時がたてば解決してくるだろうと思つた。こうした安易な考えは班別討論、輪読でもろくも碎かれた。先生は僕の回避してきた問題をきかれて「そんなふうなら勉強も面白くないだろう。日頃の生活に全力でぶつかっていない証拠だよ。そんな時は勉強を止めてしまふんだよ。」とおっしゃつた時、何ともいえずみじめな感じがした。そして自分があまりに自分をごまかしていたことに気がついた。

岡先生のお話には感激した。先生の情熱に打たれ、その場の雰囲気を押されて興奮していたような気もするが、何か生きる目標といつたものがおぼろげながらつかめたような気がした。また玖村先生のご講話は万感胸に迫るものがあつて涙が出た。長いこと忘れていたものがよみがえるような気がした。とにかく、あとは家に帰つて静かに合宿を反省し、これだと思ふ道を一生懸命生きてゆこう。

(九州大学 医 三年 友池仁暢)

古典に取り組もう

個人生活において、自分を多方面にわたつて観ることの大さと、団体生活において人との関係の中で自己を観ることの大切さを感じさせられました。そして遅々とした歩みではありますが、古典に取り組む喜びを知りました。いままでの自分の生活が無為であつたという恥ずかしさでいっぱいです。しかし、いまは日本人としてまた青年として、自覚をもつて真剣に取り組んでゆけそうです。敷島の道、和歌を詠むことのむずかしさを痛感しましたが、自分も歌を作ることが喜びとなるよう、大いに勉強します。

(日本大学 法 三年 海野正博)

来年も何とかして参加したい

合宿初参加の私は、第一日目の動揺を忘れられない。そうした自分に諸先生の講義は目のさめる思いだった。ことに岡先生の講義は約二〇ページもノートに書きとめた。家に帰つて再び先生の講義内容をかみしめられるうれしさで一杯だ。

私は貧しい家庭に生まれたので、すぐには大学に進めなかつた。それだけに、二年間かかつて学費を稼いだ。学校に入つて「学問」というものに疑問を感じた。合宿で本当の学問

を学びたい一心だったが他の人たちと私の立ち場のくい違いを認めないわけにはいかなかった。もし他の人たちも私のような生活を与えられた時、なお学問に志すことを忘れないだろうか。そして活発な発言ができるだろうかと考えた。私はみんなのように素直になれなかったことを強く後悔している。来年の合宿に参加する経済的な余裕が出来ないかも知れないが、参加できるよう努力するつもりだ。私には先生の言葉が心の底まで響いているようだ。

(電子工業大学 電工 一年 末永広司)

全身をぶっつけて生きよう

私はこの四泊五日の合宿で、日頃体験することが出来なかつたきびしく生きるということを学ぶことが出来ました。これからはどう生きるか、具体的にはわかりませんが、「朝聞道夕死可矣」というように、毎日毎日に自分の全てをかけて、全身をぶっつけて生きたいと念じています。

(鹿児島経済大学 経 三年 森 哲郎)

旅行のつもりで来たのに

友人から、この会の存在を知らされた時、正直いって、私はこの機会を利用して、旅行してやれという、さもない根性でした。そして、合宿一日目はなんとなく落ち着きませんでした。

した。しかし、一回、二回と班別討論を重ね、先生方のご講義を拝聴しているうちに、いつしか、真剣に人生について考え、日本の将来について、私なりに考えている自分を発見して、うれしくなりました。そして、いろいろな考え方をする友人に接し、私にとっては大変な収穫となりました。

とかく自分自身、小さな問題に捉われがちな自分を大いに反省し、本当に大局的な観点に立って日本のことを憂えることのできる自分になりたいと思いました。と同時に日本の情緒を大いに發揮し友だちのことを真剣になって、思いやることのできる人間になるよう精進する決意を新たにしました。

(東京学芸大学 学芸 三年 落合信雄)

来てよかった！

川井先生のご紹介で気軽な気持ちできたのだが、私のいまの気持ちは「何事もやってみなければわからない」という単純な気持ちである。全国から集まった見知らぬ友らの前に、消極的な私はあまり話すことができなかったが、心はすぐなごみ合うことができ、この合宿は充実したものとなった。

以前の私は「友情」「国民同胞感」などといったものが自分の心を捉えようとは思わなかったし、そんなことを考えるのは偽善的で気恥ずかしいことと感じていました。

今までの無気力で真剣さの足りない私の生活をかえりみる

と、この合宿のご講義はあまりにも胸をさすものがあつたことを忘れることはできない。

川井先生の共産主義批判は、やや左翼的である私の考え方を根底から揺るがした。岡先生の「日本の情緒」は情緒的な面から私の日本的なものを再認識させて下さった。私は先生に深い尊敬の念をいだかずにはおれません。先生のあの枯淡な姿に、揺るぎない信念と真に日本を憂える心を見出し、老年にもかかわらず、声を大にして訴えられる姿は筆舌に尽し得ない感動であり、先生のお言葉は私の魂の中にしみ入る響きを与えた。

また木内先生の強く大きな信念にわずかの抵抗を感じつつも、先生の心の中に真実を見たように思います。さらに大きな収穫はただの歴史としてしか捉え得なかつた聖徳太子や松陰先生などのお言葉に触れ、その強く偉大な教えを学ぶことを身にしみて感じたことである。この合宿からの収穫は枚挙にいとまがないが、一言にしていうと、学校教育やマスコミその他で教えられてきた既成概念の価値感がまさに逆転したということ。日本の国のこと、天皇のこと、すべて然りです。

ただ少々残念な事は、人と人との魂の触れ合いという感激的な面を、表面でなく、真底から体得できなかったように思うことである。

最後に一言「来てよかつた」というのが私の真実の言葉で

す。  
(鹿兒島大学 法 一年 土岐直彦)

僕は不満と自責で泣きながら帰りたい

待ち望んでいた城島合宿もついに終わってしまつた。合宿はたしかによかつた。だが、自分の胸には数々の不満が渦巻いている。本当に真剣にこの合宿に對しようと思つた者は軽々しく、「これでよかつた」とはいえないのではなからうか。真剣さが強ければ強いほど、当然ここに深い反省が起こつてくるはずだ。私は不満といつたが、それは決して合宿そのものに対してではない。それは自分自身に對する不満である。このいたらざる自己を深く省みた時、くやくやくやしくてなぐり倒したい思ひです。

合宿の最後の夜、コンパが行なわれた。みんなお互いに手をつなぎ合つて屋上で歌をうたつた。みんな楽しそうであつた。いや、コンパに限つたことではない。自分の目からでは少なくともみんなお互いに楽しくやつていたように思う。

たしかになごやかさは大切だ。それが国民同胞感の根底をなすことも事実だ。しかしそれだけのみではたしていいか。

玖村先生は「教育とは魂の奥底に火をつけることだ」とおっしゃつたが、合宿においても全く同じことだ。我々はこの合宿訓練を通じて、本当に自分の魂の奥底に火をつけねばならない。だが、単に談笑し合つていたり、固く手を握り合つ

たりするだけで本当に火がつけ得るだろうか。

魂に火をつけるものは悲痛な感激だ。そしてそれは単なる喜びの感動というよりは、むしろ自己の心の奥底に徹した痛々しいほどの悲しみではないだろうか。この自分というものがいやでいやでたまらないという痛烈な自己反省、泣くほどの悲しみ、ここからのみ人間としての真の出発が生まれてくるのではなからうか。

合宿はたしかによかった。だが僕はこれでよかったなどと心晴れ晴れとして帰ることはできない。僕は不満と自責で泣きながら帰りたい。

(岡山大学 理 三年 伊藤三樹夫)

### 合宿の体験を生かしたい

まずこの合宿に参加して最も感動したことは、よき先生方の真実をこめたお言葉に触れたことです。そして自分の進むべき道を得た等とはまだいえませんが、一定の方向に進むべきことがわかりかけた気がします。

第二に多くの友らとともに寝食を共にしたことにより、多くのことを学びました。まだ本当には友の心を、また自分の心を理解したとはいえませんが、相手の気持ちになつてその心をわかろうとする気になりました。

第三に国家意識、国民同胞感といったものを高らかに誇る

ことができるようになったことです。日本のあるべき姿を自分も求めようと決意しました。

第四に物事を見るのにセンチメンタルなことではだめだということを強く感じ、もつとリアルな目で見なければものごとの真理をみきわめることができなさと痛切に感じました。

最後に自分が体得したこれらのことを、多くの友に伝えよう広めようと思えます。

(横浜国立大学 経 二年 青木 茂)

### 古典のすばらしさを知った

僕はこの合宿の感想文を書くにあたり、これまで自分は何と卑屈で逃げ腰であったのだろうと恥ずかしく思います。

この会に出席して感じたことは、ただすばらしいの一語につきまます。当代一流の諸講師のきびしい中にも暖か味のあるすばらしい講義、特に岡先生が日本の情緒についての講義の中で「多数の知や意によって、たとえ一人であつてもその人を悲しく思わせることがあつてはならない」や「今の日本人は、悲しみを悲しみとして受け取ることができなくなつてい」と述べられた言葉に強い感銘を受けました。

またこれまで学校で教わらなかつた聖徳太子の慈悲あふれるご精神や、吉田松陰先生のお言葉に触れ日本の古典には、実にすばらしいものがあるなと思いました。これらのことは

将来、僕の血となり肉となるものと思えます。

(神戸大学 法 一年 深津春義)

やれるだけやった

私はこの合宿で班長という重大な役目を引き受ました。私としてはこの合宿にける期待は大きく、気力も充実して合宿に取り組んでいたし、それまで学び求めてきたことを精一杯發揮すべき時だと思いましたが、やれることだけはやった、またいべきことを言ってきたと思っています。

今後の問題として、合宿に参加された他大学の諸君と同信協力の場を一層拡大していくことはもちろん、九大を中心とする福岡地区の方々との結びつきを、不転の決意でもって推し進めてゆく覚悟です。

(九州大学 工 二年 稲津利比古)

やる気力が湧いてきた

期待と不安を持ちつつ何かを求めようという気持ちで参加しましたが、先生方のご講義や全国から集まった友らとの真底からの意見交換を聞きながら、ひしひしと今迄の自分の怠慢さを感じざるをえませんでした。ただただ、自分にやる気を奮い起こさせてくれた先生方に感謝いたします。

(亜細亜大学 経 一年 藤原康隆)

自分の進む道がわかりかけた

すばらしい体験をたくさんしましたが、特に生涯心の支えになるようなすばらしい言葉を、先生方からお聞きしたことが最大の喜びです。これらの言葉を真に自分のものとするために努力することが、私のなすべきことだと思います、いやせねばならぬと思います。私はこの合宿ではじめて他人に対する思いやりということが、実にむずかしいことだと身をもって経験しました。なんだか自分の進むべき道がぼんやりではありますがわかってきたようですし、また自信もできてきました。とにかくすばらしい合宿でした。

(京都大学 法 二年 福島義治)

思想は日々の行動である

私が国文研で真の学問というもの、また人間いかに生きべきかという問題と取り組んでから三年近くになる。

国文研は私の大学生活の中で、一番大きなウエイトをもっている。義と勇に乏しい私ですが、社会に出てもこの国文研で学んだものを繰り返し繰り返し思い出し、弱い意志を振るい起こしつつ生きてゆきたいと思えます。「思想は日々の行動である」とするなら、私の思想は実に恥ずかしいものとい

わなければならぬ。私に課せられた問題は、考えていることをどう日頃の行動に具現するかということですが、この宿題をもって実社会に出てゆこうと思ひます。

(熊本大学 法文 四年 平 休憲)

### 軍事問題にも関心を

この合宿にははじめての参加ですが、多くの収穫がありました。また解決し得なかつた問題、さらにむずかしさを加えて心に重く残っていることもあります。しかしこうした問題に対処する態度と言うものを、先生方の講義を通じて、日本文化の豊かさ、深さを教えられたのは更に大きな収穫といえるかもしれません。本当に人生というものを、学問といふものを、日本文化というものを全身全霊をこめて話される諸先生のお話しと、それを同じく受けとめようとする学生諸氏の態度に深く感動しました。

さて、この合宿の班別討論で驚いたことは、学生諸君の軍事問題に関する認識が非常に薄いことでした。押しボタン戦争の時代に通常軍備がなぜ必要かなどという最早神話となつた質問にはあ然とさせられました。他班の班員と共にこの問題を熱心に論じ合い、ある程度の理解は深めましたが、やはり現在のような特殊戦略が国際舞台に躍りつつある状態の中で、大学生がこの問題をなおざりにすることは決して許され

ないことだと思われれます。昭和四十五年危機を叫ぶ前に、この問題の検討がさらに必要だと痛感しています。

(防衛大学 化 三年 黒川雄三)

### これまでの自分の殻を打ち破って

真心というものは実にあたたかく、またきびしいものだと実感しました。班別討論以外においても真剣に、共に語り合う時、他では決して経験できない真剣さ、心の触れ合いを感じ、感激の連続でした。

私はこの合宿の感激の中から求める姿勢が生れ、それにまっしぐらに進む力がごく自然に出てくるのだということを知りました。岡先生のお話から理屈なしの真つ裸の人間、日本人になりきることを教えられました。頭で考えていた数多くの知識が自分の回りを包み、その根本をつかむことを忘れていた自分がいかに弱いかを痛感しました。また一歩一歩を着実に踏みしめ、統一的に判断、把握できるようになつてはじめて本當の意味の自分が出るのだと思ひました。また心の豊かさということについても多くのことを体得しました。心から激しく求めていく友らの姿を、思いを、心に浮かべ、これまでの自分の殻を破つて学問を積み、心を開き、一途に澄みきつた透明な自己を形成してゆきたいと思ひます。

(早稲田大学 商 四年 宗 巖)

## 真心のこもったことばに打たれた

私はこの合宿で二つのことを学びました。一つは共產主義の誤りにはつきりめざめたことです。それはイデオロギーの問題ではなく、心の問題だということを教えられました。もう一つは、和やかながらもきびしい団体生活を体験出来たということでした。そこで気づいたことは、本当の真心のこもった言葉は人の胸を必ずうつとということです。理論だけを話している人はすぐわかります。このことは自分自身の問題としても大いに反省させられました。

この合宿を糸口にして、ますます自分をきたえていくとともに、人のため日本のために尽す人物に少しでも近づこうと努力していきたいと思えます。

(九州大学 法 二年 宮崎義美)

## 時間の少なさを感じた

本当に学問するということの意味を教えていただいたこと、これが最大の収穫でした。学校は違っても、同じ世代の人たちの心から語る言葉に耳を傾けることができ、また諸先生方の心に響く言葉を聞くことができ、まったくありがたかった。

四泊五日の日程は肉体的に多少きついと感じたことは事実ですが、一方時間の少なさを感じられません。しかし現在の私は、この短い時間で得た貴重な体験を絶対に手離さないという決心を深く心に固めています。

(亜細亜大学 商 三年 伊藤信勝)

## 友にぜひ呼びかけた

昨年の桜島合宿の時よりもまた一段とより深いもの、言葉では表現できない感動、自己反省をきびしくさせられました。

この心に迫まる気持ちをおのれかきりものとせず、いつまでも心にとどめ、研究を積み重ねて参りたいと思えます。

この合宿の内容を知らぬ友にぜひよびかけ、来年は一緒に参加させていただきたいと思っています。

(鹿兒島興業信用組合 伊集院 豪)

## 反省と決意と

苦しい五日間であった。自分のありのままの姿を人の前にさらけ出すことが、いかに困難で勇気のいることであることか、改めて知らされる思いである。

班員の前で、自分の意見をはっきり表明できなかったこと

は、日頃いかにあいまいに生活しているか、何事に対しても何の意見をもとうとしないので生活していたかを痛感させられるものであった。

この合宿での大きな課題の一つは「個」と「全」との関係の追求であったと思う。全体の中で自分というものをいかに生かしてゆくかということが、さまざまの形で述べられたが、自分にはまだまだ判然としていない。

そこで講義内容などを整理してみることは当然であるが、日本の古典を読むということを実行したいと思っている。これは断絶した日本の歴史を実感するという大きな課題の自分なりの実践であると思う。

そのような中で「全」の中の「個」として自分を見つめ、磨いてゆくことが、諸先生方の熱意に報いるささやかな方法ではなかるうか。

まだ抽象的にしか理解し得ていないさまざまのことを、仕事とか生活の場にいかに具体化してゆくか。松陰先生のいう「目前の功効」に走らないで、「永久の良図」をいかに現実追求してゆくか、この合宿で経験として実感されたものを常に端緒としてゆきたい。

(福岡市天神岩田屋 金子寿和)

### 心のあたたまる思い

四泊五日間の合宿で最も私を感動させたことは、第一にきびしく自己を見つめることの大切さである。われわれの生活の中で、教育の現場で忘れがちな点はこれである。他に責任を転移させ、自分の責任を回避することである。講師の先生方の講話の中で、人間の魂を揺り動かす言動の根源は、まさしく不断の自己研修から生まれるものであることを実感して味わい得たことである。

第二は日本人としての自覚を体得したことである。先賢の言葉を聞き、講師の先生方の熱烈な講話をお聞きして、自己の心が洗い清められ、概念としての日本人的考え方から、本物の日本人の心と呼びさまされた。日本人としての自覚を体得したという思いがする。

また第三に班別討論の中の同胞意識、連帯感の大切さを体得できたことも特筆すべきことだと思ふ。

国文研の方々の助言、会員の討論にこれまで味わえなかった感動を覚えた。心をつくして他と語ることの喜び、これほど心のあたたまる討論をしたことはない。

(熊本市立白川小学校 押野 格)

## 心の姿勢を正す

不安と期待とを胸に合宿に参加したが、参加してよかったと、いまはただ諸先生はじめ合宿の諸兄に感謝し、お礼申しあげます。

ほんとうに人間らしく生きるといふことを、尊い体験の集積から生まれた講義を聞いてわずかながら実感することができました。現在までややもすればいろいろな問題の責任を、自分以外の外的条件のせいにしていたことをしみじみ反省するとともに、自分の不勉強さをまざまざと見せつけられました。

心の姿勢を正す。心の姿勢をできるだけ正しい方向にもってゆくためにはたいへんな努力がいる。

私は本年三月日教組を脱退したが、これも一重に教師としての姿勢を正すためであったが、多数の教師仲間の中から脱けだすのには勇気と信念が必要であった。

これからはいままでの自信にさらに合宿で得た知識と考え方を結びつけて、努力を続けてゆこうという覚悟を新たにしました。  
(熊本市立城南中学校 川嶋政重)

## 職場の推進力となろう

日教組によって毒されているいまの教育の姿を、何として

も正さねばならないという一念から結集された熊本市教育研究会も、その根底は国民文化研究会の心に支えられていることを確認しております。

この合宿で自分の心を働かせるといふことを体験させていただいたありがたさ、過去に生きた人々のその心的体験を自分の心の中によみがえらせることなくしては、真の日本の教育道を確立することは不可能であることを体験させていただいた私は、まず自らの姿勢を正し、心を正すことに専念して、各職場の推進力となることを誓います。

(熊本市教育委員会 高瀬邦男)

## いま直ちに同志と共に

ここ数年、学力テスト斗争いらい、強い疑惑を抱き続けてきた日教組の指導ビジョンが、総評や社会党とともに何を指向していたのか、今回の合宿の講義を拝聴して全く明確になった。これはただごとではない。いかに樂觀的な人生観の私でも、何らかの有効にして実質的な手を、いま直ちに同志とともに打ってゆかねばならぬと痛感させられた。新学期までにじっくり計画を練りたい。

歴史の教員である私には、聖徳太子、吉田松陰についていささか知るところはあっても、授業のうえでは生命のこもらぬ、時代の代表的登場人物として紹介するにとどまっていた

ことを深く反省する。今後さらに勉強してその精神を生徒たちの多感な魂に吹き込み、「永久の良因」をはかりたいと思う。

天皇の問題については、日本文化の中心である天皇を失ってはならぬと、理屈抜きにただ信じてきた。しかしこれは単なる日本人としての血と、私が士官学校で受けた教育によるものであって、教育者である現在の私としては同僚や生徒に納得させる言葉がなくてはかなわぬ。合宿前に読んだ「新学風を興すために」と、今回の聴講、班別討論等を経て、いまま他人を説得する確信が芽ばえつつあるように感ぜられる。

最後に教育は「人」であることを確信する。日本の正しい伝統と、日本的思考を若人たちに伝える聖職にふさわしい「人」になれるよう、不断の努力を続けてゆかねばならぬことを痛感している。  
(熊本市立藤園中学校 桑原 卓)

やればやれる、やらねばならぬ

かねがねこの合宿については雲囲気、目的等聞いていたが、実際に参加させていただき、すばらしいと感じました。感動し、すばらしく思ったことはたくさんありますが、とりわけ、班別討論の場において、二日目あたりから心を打ち開いて、お互いに思うこと苦しんでいることを話し合い、

いつの間にか遠い昔からの友人のような気持ちになれたことです。

実社会のとかくうわべだけを取りつくるって、本当の気持ちを表わさない、潤いのない人間関係は、止むを得ないものと半ばあきらめかかっていた時に、このような体験をしたことにより、やればできる、いややらなければならぬと確信を持ち得たことは非常に喜びです。

(日商株式会社 大城 東)

日本人としての教育を

この研修に参加するまで、国文研とは何であるかについて漠然とした疑問しかもち得なかったが、合宿に参加することによって実感をもってこの会の使命がわかるようになり、この会に入会することを誇りと思うようになった。

合宿を終えて私のつかんだ目標は、日本人としての意識教育の必要性ということである。講義や班別討論の中で、自分の胸を貫いたものは教師としての使命感である。「日本の国家はどう歩まねばならぬか。それを支える日本人とはどんな感覚と思想をもち、どう生きるべきか」。それをひたすらに求めていく日本人の精神をもった人間を作るということに、今から特に考え実践し、多くの同僚に働きかけ、共に進む教師集団を作っていくたい。

この合宿で私たちは「なぜ先生方は本当の日本歴史を教え  
てくれなかったのか」「国旗や国歌に対してすなおな感情を  
もって接しえない心情を私たちにうえつけたのは誰か」と  
いう声を聞き、教師としての目標を失い、自信もなく過ごし  
てきた自分自身を恥ずかしく思う。この若人の声に教えられ  
た反省を大事にして、愛国心教育というものに本格的に取り  
組まねば、現時点に生きる教師とはいえないことを考えさせ  
られた。

次に講義を聞いて、いままでもっていた世界観の甘さと皮  
相さを知らされ、痛撃を受けた感じさえする。まだ本もの  
それをつかんだとはいえないが、再構成ししっかりした信念  
を支えるものももちたいと思う。聞く読むということをしっ  
かりと自分なりに吟味して、その奥にあるものを確かめてい  
く態度を大事にし、学校に帰ったらこの感激を全員に知ら  
せ、定例会を設けて話し合いを深めていきたい。

(熊本市立五福小学校 本田敏雄)

### 深い感動と喜び

世をあげて唯物的功利打算と、動物的享楽の追求の世相の  
中に、岩根くぐる真清水が人目につかぬ如く、日本の教えの  
源流と真の姿が、思いがけなくもこんなささやかな名もなき  
研修団体の中に生きて存在している事実を発見して、深い感

動と喜びを覚えました。ここに国文研の皆様の多年のご苦労  
とご尽力に、心からの敬意と感謝を表します。

(福岡県田川郡川崎中学校 向山 正)

### 恩師に心から感謝をする

現代日本の万般の流れは、私ども全国民の作りだしたもので  
あるのに、人はまだ現代悪を他人の作りだした罪のごとく  
に言い、またおしつけることに汲々として、自己反省を  
忘れ、自己とその家族のことにみに力を入れ、その中でバカ  
ンス等の言葉の流行のとりこになっている。しかしながらか  
くいう私も、省りみて教師として目前の動きのみにとらわ  
れ、国家永遠の良図を忘れていたことを知り、今よりは修身  
を第一としてこれを、強はず、子らを感化する覚悟をお与え  
下さったこの国文研の皆様に、厚く厚く感謝申しあげるとと  
もに、ここに参加をすすめられた恩師熊本市教育長中満清人  
先生に心から感謝いたします。

(熊本市立藤園中学校 甲斐幸雄)

### 得がたい教訓を得た

昨年夏、市教委の阿蘇研修に参加して一応の経験はしてい  
たが、国文研の研修には希望の中に一抹の不安がないでもな

かった。

特に日程の中の和歌の創作に抵抗を感じた。しかし日程を追うに従ってそれらの不安は解消し、厳しい中にも楽しい講義をしてくださった諸先生の人格に触れて、明日からの生活の中に力強い何物かを植えつけられ、方向づけをさせていただいたことは、今後の生活に生かされると確信をもつことができた。

ことに学生諸君の真摯な態度や、これを指導なさる国文研の先生方の、きびしい中にも愛情をこめた態度に接したことは、教育にたずさわる私にとっては得がたい教訓を与えていただいたものとして、大きな収穫の一つでした。

(熊本市立黒髪小学校 浦崎 堯)

### 頭の下がる思い

私はこれまでいろいろな合宿研修に参加したが、今回の国文研主催の合宿ほど、質量共に充実した研修価値やその効果の大なるものを知らない。

四泊五日間にわたり指導いただいた各講師の先生方の、個性豊かにして、意気正に天をつく気迫と熱情に激しく心をゆさぶられた。

また小田村先生をはじめとして、役員の諸先生や国文研会員の方々のまごころからの献身的な運営にもただただ頭の下

がる思いであった。日頃念願していた学生のみなさん方と接触し、若い人達の考えや抱負をすこしでも理解することができてうれしくかつ心強く感じた。またわれわれ教師が数年来憂え続けてきたことや、日本の教育を確立するにはこれ以外に途はないとの確信の下に「教育の正常化」に努力してきたことを、今回の合宿でさらにその核心に近づけていただけたような感じである。

さてそこで今後に対処するわれわれの道であるが、まず研修期間中の講義内容を再吟味し、教育の場に生かす方途を考究する。特に教師の自己研修としては「吉田松陰先生」の精神、塾経営の真髓に迫ること、国文研発行の「新しい学風を興すために」の一集から三集を精読することである。

次に教育の場で「誠実とあたたかさ」を実践し、生活からも、父兄からも、同僚からも、信頼と敬愛を得ることのできる人となるよう、根気強く、地道に、本分に精進することである。

さらに国文研の合宿だけに終わらせず、地元において参加の諸兄や趣旨に賛同の有志、学生の方々と会合し、会の精神普及につとめること。以上のようなことを深く心に銘じた次第です。

(熊本市立帯山中学校 森井元雄)

## 一本の筋金が入った

大いに期待された合宿であった。企画運営、講義内容等、現代の我国においてこれ程充実した効率的な研修機関はあ  
るまい。

第一日の小田村理事長にはじまる講演は、岡・木内・花見・玖村各講師の講義で最高潮に達した感さえあった。また小柳・川井・夜久諸先生が説いて下さった聖徳太子、吉田松陰の格調高い言葉は、我々の心情を根底からゆさぶるに十分であつた。

マルキシズムとの対決は、われわれの理論の甘さ、知識の浅薄さによる一種の忌避感があつたが、川井助教の明解な解説は、昨年の熊本市主催阿蘇研修における林健太郎氏の講義を一層うらぎれるものとして感銘深いものがあつた。

生活信条をモットーにして学生にきびしく、やさしく当たられた国文研の指導者の情熱は、われわれの教育的信条に一本の筋金を入れてくれた。班長会における適切できびしい自己批判の表われがそうであつた。このようにして育つ青年学生と対比して、ツイストや享楽にその目をまかす学生の何と危ぶまれることか、私も大学四年の子供をもつ親として何となく家庭教育のあり方が反省させられた一面でもあつた。来年は子供をぜひ参加させたいと思つている。国文研のご発展

を祈つてやまない。(熊本市立出水小学校 西岡静雄)

## 悪夢の二十年を越えて

いまを去る二十年前八月十五日、私は高専の一年生として本土決戦のためのたこぼ掘りに精を出していた。

その年の三月までは、学徒動員で熊本の航空機会社で雷撃機の組み立て作業にがんばり、あくまでも祖国の戦勝を祈りつあつた。かの沖繩戦のころ、多数の若者が特攻機で健軍飛行場をとび立っていったのを見送り、われわれもあのようにして死のうと決意していた。

その後二十年、価値の転倒は私に生きる意義を見出させなかつた。全学連のもと、九州学連の中であはれまわつた。そして小学校教師として就職し、あらゆる古いものを打破してきた。

いま私はこの合宿に参加して全く悪夢の二十年であつたといいたくなつた。あるとき飛行場をとび立っていった雷撃機はやぶさ、呑竜に乗つて死んでいった人たちは、今のような日本になることを予期しておつたであらうか。やはり神州の不滅を信じ、後につづくものを信じて死んでいったに違いない。その国が今や国の礎石を思わず、とうとうとした赤の思想に岸を洗われている。その姿をこの合宿でいやというほど知らされた。どうしてこんなことをもつと早く知らなかつた

のだからと残念でたまらぬ。しかし今からでも遅くない。猛烈なフアイトをもって実践の中に生きたいと思う。

岡先生の日本の情緒、日本人は日本人の水の中に住めといわれたこと、松陰先生の永遠の良図など、ぐいぐいと私の心をしめつけてくる。もうまけないぞと思う。又そう思うことよって、私の体の中に大いなる勇氣と信念が湧いてきた。もう誰が何といおうと私は私の節をまげることとはしない。私は日本の教師として日本の子どもを育てたい。日本の水の中に住む日本の子どもを。

又私は日本の美術教育者でもある。輝かしい日本文化の伝統を私は大声をあげて子どもたちに知らせ、伝承させるべく一生を貫きたいと願っています。きつとやってみせるつもりです。

この合宿は二十年の間ねむっていた私の心にすごい火をつけてくれた。この火が消えないよう常に自己研修し、同志とともに進んでゆきたいと思う。

(熊本市立白山小学校 赤星 宣利)

いまからでも遅くはない

この合宿に参加するまで、本当に自分は目前の効功しか考えていなくて不安でした。しかしこの合宿にきておられる学生諸君が、これほどまでに熱心に、これからの日本の進むべ

き方向を研鑽しているのを見て、私の勉強の仕方について、またその足らなさについて痛感させられました。

これからでも遅くはない、帰ってもう一度合宿での問題を自分なりに勉強したい。本当にありがとうございます。

(宮崎交通株式会社 瀬川芳彦)

### 感無量の心持

私はこの合宿教室に初めて参加し、最初のうちはだいたいじょうぶだろうかという不安であった。だが時がたつにつれて、いままでの自分がいかに物事に対し無頓着で考えなしで行動していたかとしみじみ思いしらされ、今後いかに物事に対応していくべきか、またいかにして自分を鍛えていくべきかを思い知らされ、感無量の心持ちであった。社会へ戻っても現在の心を失わず、精一杯やっていきたいと思う。

(宮崎交通株式会社 日高紘一)

### 身のひきしまる貴重な体験

私は、自分の知識、教養の程度を知りたい、またその持っている知識の幅をひろめたいと思ってこの合宿に参加しました。

合宿の途中で自分の教養の浅さを考え直さざるを得ません

でした。これまでの自分の生き方が、まことに安易なものであったことを深く考えさせられました。今回の合宿に参加したことが、今すぐにどうなるというものではありませんが、これからの人生において、大なり小なり必ず表われてくることを期待し、自分なりに努力してゆくつもりです。本当に五日間、充実した、身のひきしまる貴重な体験をしたと、改めて感謝いたします。

(株式会社 岩田屋 中村 進)

### すばらしかった女子班 (オブザーバー参加)

四泊五日のきびしい緊張の中にも、なごやかさを合わせ持った合宿を終え、女子班のお世話をさせていただいたことをも含めて、深い喜びを味わっております。

過去三回の合宿に比べ、今年の女子班が一番充実した班であったと思います。討論の内容とその展開、和歌の創作と批評、班員相互の研修等においても真剣で深みがあり、とてもすばらしかった。これは班員が厳選された人々たちであったためだと思います。この合宿教室を成功させるためには、すぐれた学生たちをどう集めるかが第一条件であるところづくしく思いました。

女子班では最初の和歌創作と相互批評 (スケジュールを交更して二日目の午前中に行なった) が和歌導入講義の理解を深めさせるとともに、その後の班員の心の交流に大きな役目

を果たしたようです。またオブザーバーとしての立ち場を活用し、班別討論の時間に岡潔先生を班にお越しいただき、お話をうかがったことや、朝食前の半時間、夜久先生にお願いして班員の和歌を批評していただいたりしました。これらのことが女子班全員の心に得がたい経験として残っています。

諸先生方のご講義に関連して、各自がこの合宿に求めてきたものが何であったか、また心の姿勢としての思想を正しく身につけるためにはどうしたらよいか、というような問題について話し合いができたことは大きな収穫だと思います。

(武蔵野女子短大 文 二年 田川美代子)

### 本当にいい方々ばかりの女子班であった

今年の合宿ほど魅力ある時を過ごしたことは今までになかったことと痛感し、その経験を誇らしく思います。

去年の合宿の後、何か一つ目標を定めて努力しようと決心し「人間を愛すること」をめざしてきました。思いがけなく女子班の副班長をおおせつけられ、たいへんな重荷でしたが、去年一年の心がけが少しでも助けになったような気がします。また班の方々が本当に良い人であったことがなによりしのあわせでした。

班別討論は限られた時間なので、いろんな問題について討議するよりも女子班にふさわしい身近な問題や、班員の間か

ら出された問題などについて話し合いました。これが班員相互の心の触れ合い、交流に良い結果をもたらしたように思います。しかし、班別討論の進め方については、男子班が政治問題を扱っているのにそれをしないので、物足りないという人もいましたが、女子班としてはこれでよかったと思っております。班員のみなさんが自分の心をきびしく、冷静に見つめ、湧いてきた感情を大切に育てるということを、合宿を通して身をもって感得されたからでしょうか、初めて作ったとは思えない、すばらしい歌ができて、私は完全に自分の勉強の足りなさをみせつけられた感じでした。

今はただ班員のみなさんが、合宿の雰囲気にもまれたというだけでなくて、すばらしい体験としてこの合宿をとらえられて、今後ともこの感激を持ち続け、ともに手を取り合って勉強してゆきたいと思います。

(東京大学 理 三年 脇山早久良)

### 心が洗われたような清々しさ

緊張に明け暮れた五日間でしたが、いままで経験したことのない充実した合宿でした。

先生や先輩に勧められて、国文研とはいかなるものであるか、また、日本文化について真剣に考えてみたいという気持ちから参加しました。最初の二日間は不安と孤独感で息づま

るような気持ちでしたが、三日目ごろから、友だちともようやく心が通い合うようになりました。そして諸先生方の心のもったご講義を聞くにつれて、この合宿のめざすものがおぼろげながらつかめたような気がします。

また、和歌創作にあたっては、歌を作ることがいかにむずかしいかを痛切に感じましたが、まずいながらも自分の気持ちを歌に表わせたときは、心が洗われたように、清々しい気持ちでした。

この合宿では、日本語の問題がしばしば提起されました。私たちは日本人でありながら、母国語に対して無関心であり、いかにいいかげんな使い方をしていたかと改めて反省させられました。心のもった美しい日本語を話し、書き、歌を作るように努力して、はじめてりっぱな日本的情緒がつかわれるのだと思います。

(鹿児島大学 文理 三年 林 佳世子)

### わらをもつかむ気持ちで参加したが

自分の生きる道がわからなくなり、わらをもつかむ気持ちで合宿に参加しました。いま本当にきてよかったと思っております。

この合宿で、日本人であることを教えられ、いままで日本人でありながら、日本人として踏みゆくべき道をあまりにも

知らなかったことを痛感し、日本人には日本人の道があることを教えられ、これこそ私の求めていたものなのだと思います。

あまりにも多くのことを吸収したためまだ整理できませんが、真に美しいものの方を見方を教わった。私は、今後美しいものを美しいと感じることのできる生き方をしたいと思っています。謙虚な心で素直に歌を詠むことを、これからも続けたいと思います。

(西南学院大学 文 三年 大村圭子)

### 確信のあるお話を聞いて

先生方、講師の方々の確信あるお話しを聞き、いままで心の中にもやもやしていたものが、ぬぐい去られたような気持ちです。

正しいことは強い信念でやり通さなければならぬという、確固たる信念が確立できたことをうれしく思います。

(東京女子大学 文理 一年 長石真澄)

### 岡先生の奥様のように

最も心を打たれたことは、真の日本女性の美しさ、清らかさを、岡先生にやさしく寄り添っていらっしやる奥様のお姿

に拝見したことです。私も奥様のようにやさしく、清くありたい、あるように努めたいと、涙が出るほど感激しました。

岡先生のお言葉、お姿に直接触れることができ、先生のお人柄に強く引かれました。あいまいな妥協は決して許されない、確固たる信念を持ち、しかも思いやりのあるお方に、私ははじめて出会うことができました。

数学を勉強する者は、ともすれば融通のきかない人間になりやすく、そうした点についても、岡先生の数学に対するお心は、見習うべきだと思いました。合宿に参加して、ほんとうによかったと思っています。

(九州大学 理 二年 有川郁子)

### 進むべき道がはつきりした

この五日間、好天に恵まれ、美しい自然に囲まれて、心身共に洗われるような日々を送れたことを、心からありがたいと思っています。思えばこの間、未熟な自分が実に情けなくなつたこともありました。そして今日まで、何気なく日々を過ごしてきたことが惜しまれてなりませんでした。これまでも、私も自分なりに考えて生きてきたつもりでしたが、まだまだきびしさが足りなかったとつくづく思いました。

諸先生方のお話をお聞きして、そのお話の一つ一つが、私の胸深くしみ、私のこれから進むべき道がはつきりしたよう

に思います。中でも岡先生が「日本の情緒の中に生きよ、精神的な恋をせよ、真の大和撫子たれ」とお話しくださったこと、また、女子班にきていただいた時「本当の意味で幸せになってください」と一言おっしゃったことは、生涯忘れられません。これからも、私の心のよりどころとしていきたいと思えます。

合宿から帰りましても、この合宿で身にしみて感じたこと、学んだことをかみしめながら、より大きな人間になるよう、こころざしていきたいと思います。この合宿の成果は、これからの私の生き方に表われると思うと、そのきびしき、大切さがつくづく感じられます。

ただ一つ残念に思いましたことは、男子学生の方のご意見が、質問以外全然聞けなかったことです。私のように女子大の中におりますと、どうしても女子だけの考えに偏りよってしまふ傾向があり、同年代の男性が、この合宿で問題とされているようなことに關して、どのような考えを持っておられるか、ぜひともお聞きしたかったです。男子の方のように、激論をたたかわせることはできないかもしれませんが、横でそれを聞かせてもらうだけでも思うのです。何といっても意義ある五日間でした。

(東京女子大学 文理 二年 梅田咲子)

人を素直に信じられるようになった

とにかく来て良かったと思います。今すぐには何か胸が一杯で、言葉では言い表わせません。和歌を作る心構え、日本語を乱暴に使っていたことを指摘されたこと、岡先生の印象深いお話し等々深く心に残っています。何よりも、人の心がいままでもよりもっと素直に信じられるような気持ちです。

(新潟大学 人文 一年 水野雅子)

友の心に触れたよろこび

早くからこの合宿に参加するよう勧められていましたが、何かと参加する気持ちになれず、結局決心したのは東京を発つ前日になってしまいました。何の準備もなく、「新しい学風を興すために」など義務づけられた四冊の本もあまり身を入れて読んでおらず、その上、和歌創作もしなくてはならないという不安と恐れで一杯でした。また心の整理もできておらず、何を求めてきたかも自分でわからないほどでした。しかし二日ほど経つうちに、班員の心が一つになるといふすばらしい時をもつ機会ができてきました。真実を求め合う目と目に、何一つ知らなかった友の心を隅々まで理解しようとする真心に触れることができて、本当に良かったと思っていま

す。諸先生方この講義は、未熟な私にはまだまだ理解できないことの方が多かったのですが、先生方の愛情深いお志を全身に感じて、感謝の言葉もみつかりません。この合宿で得たことを一つでも多く自分のものにするように努力し、和歌創作など、できるだけ多くのことを実行していきたいと思いません。合宿後も、この堅い決意のもとに一つの輪をくずさぬよう、頑張っていきたいと思えます。

(学習院大学 経 一年 小田村静代)

### 女性らしく生きたい

いままで、なぜ私が誰れからでも男性的だといわれたかが、はっきりわかった気がします。女性として生まれてきたからには、他人からも女性らしい人だと思われるよう、この心の一つ一つの態度なり動作に生かして、女性らしくするよう努力したいと思えます。この合宿で受けた感動を言葉にすればいろいろあると思うのですが、今後はここでお教えいただいた女性として生きていくうえでの根本的な姿勢を、私の生活の中に生かしていかなければならないと思っています。

(玉川大学 文 二年 高橋愿枝)

### 「ことば」の尊さを知る

参加させていただいたことを本当にうれしく思っておりま  
す。和歌創作によって、いままでの自分がいかに「ことば」  
をおろそかにしていたか、また無関心でありすぎたかを思う  
と恥ずかしくなりました。そして自分の思いやりを伝える尊  
い日本語を、正しく美しく使うために自分の心を謙虚に磨い  
てゆこうと思います。また本当の大和心を見出すために、  
またみなさんと心を通わせながら、一首の和歌に真心がうた  
えあげられるように努力していきたいと思えます。

(玉川大学 文 二年 勝山啓子)

### 和歌を作る会合に参加したい

お互いに心を開き、共に考える場を求めてこの合宿に参加  
したけれど、最初のうちは、班の人たちの真剣な悩みや訴え  
にも傍観的な態度をとり、自分の心を本当に打ちあけること  
ができなかった。

しかし四泊五日を共にすることによって、人の悲しみを自  
分の悲しみとして受けとることをしてこなかったこれまでの  
生活態度が、これほど強く私にこびりついていたかを知り、  
心底からがくぜんとした。そして和歌相互批評により、自分

の心の中を映し出され、ふわふわとした私の心持ち、生活がそのまま歌に出ているようで、襟を正さずにはおれなくなつた。

いまでは、確固とした信念をもって生きる自信の糸口がつかめたような気がします。今後とも和歌を作る機会に参加して心を正してゆきたいと思ひます。

(福岡女子大学 文 四年 杉本行子)

### 人生を考え直した

私はいままで人生は退屈でつまらない、価値のないものだと思つていました。「真実」だの「誠」だのと口に出す人を中心の中で軽蔑して、利己的に消極的に生きてきました。

ところが、最近あまりにも空虚な生活に疑問を持ちはじめ「人生とはこんなものではないのではないか。」と思ひ、もしそうでないなら、いま自分を鍛え直さねば駄目になりそうな気がして合宿に参加しました。いろんな話を聞き考えさせられました。私は生まれて始めてこのような充実した生活のあることを体験しました。自分の中にも祖先の息吹きが流れていることに気づきました。進むべき方向がわかりかけたような気がします。真面目に生きようと思ひます。

(岡山大学 教 三年 花田美登里)

### 印象が強すぎて、いまは言葉にならない

「歴史を思う」という言葉の意味を、この合宿に参加する前からしきりと考えておりました。先生方の真心をもって説かれるお話しをお聞きして「歴史を思う」とは「先人のお心を偲び、先人をなつかしみうやまい、さらに自分の心を鍛えてゆくことではないか」と思うようになりました。これだけでもうれしきで一杯です。また先生方のお言葉によって、自由に働かせうる人の心を確信することができました。また聖徳太子のお心が、遺されたお言葉の中にいまなお生き生きと脈打っているのをしみじみと感じておりました。書きたいことがあまりにも多く、それでいて書くには印象が強すぎていまは言葉になりません。これまで合宿を続けてこられた先生方や皆様方のご苦労はいかほどかとお偲びしております。

(津田塾大学 英文 一年 友清蓉子)

### 「鮎はあゆの如く」とのお言葉に

この合宿で学んだことは、私たちは真の日本人でなければならぬ、ということでした。今までの私はこのことにはほとんど関心を払っていませんでした。無関心というわけではなかったのですが、はつきりと自覚していなかったといえる

思います。日本文化のすばらしさに気づかず、西洋文化の学問の理論性に心をひかれていたのです。

西洋文化と日本文化には本質的な差異があることを岡先生のご講義で教えられました。先生は「日本の情緒」という言葉で、日本文化の基本的精神を繰り返えしご説明されました。日本の心と一体になることが大切なことである。日本的なものを大切にしない、といわれる先生のお言葉に、私はひどく心打たれました。

「鮎」はあゆの如くという先生の言葉に秘められた、深い意味をよく考えてみたいと思います。以上のほかに感じたことはまだあります。人の心の素直さに感動し、心の曇りをぬぐった時、本当に、多くの友の心と通い合うことができることを身をもって実感しました。このことを学んだだけでも、私にとってこの合宿の体験はこのうえなく貴重だと思っております。

(鹿児島大学 文理 三年 藤本寿美子)

## 痛 感

現代日本のみにくさを、つくづく感ずれば感ずるほど、日本人の心の根底に流れる大和精神を振り起すことが必要であると思えます。

現在、悪夢に悩まされている日本民族を再起させるためには、われわれの祖先が歩んできた道を知り、その道を踏み行

なうことが絶対に必要であると私は感じました。

(日本大学 法 三年 長谷川 紘)

## 得たものは大きい

私は、九州周遊の目的で長崎に着いた。長崎の友人と彼の兄さんから合宿のことを聞かされ、どうせきたのだから参加してみようということになり、九州を一回りして当地に着いた。

岡先生に会える。ただこれだけでもよかった。この合宿全部を通じていつも不満が心の一隅にあつた。エゴイストであることに原因しているのかも知れない。また参加者の全員がこの合宿をよく心得ていて、雰囲気酔っていると感じられたからかも知れない。とにかくこの不満は、はっきりと自覚できそうもない。

しかし、ここで得たものは大きい。これは、大きなものを得る心がまえを得たことです。むしろ得るといえるのはこれからのことであろうと思うが。

(東京工業大学 理・工 一年 天川東作)

## 短歌詠草について

合宿第二日の、夜久教授による「短歌創作の手びき」の導入講義を経て、全員が第一回の短歌創作を行なった。総数六百七十余首。そして十六班(男子学生班十四、女子学生オプザーバー班一、社会人班一)に分れて、各班ごとに行なわれた相互批評の時に、その歌を作った作者の心境の開陳、質問を行なって、一首一首、作者の気持ちを汲みとりながら緻密に批評し合った。時には微苦笑、爆笑を誘いながら、なごやかな雰囲気にも包まれ、班員相互の心の交流を深めるのに大いに役立った。ついで第四日目の鶴見岳登山(リクリエーション)のあと、第二回目の短歌創作が行なわれた。これまた六百七十余首。前回と合わせて参加者の創作総数千三百五十余首の中から、なるべく一人一首以上を選んだが、はじめての創作であったため、短歌にならないものはやむなく割愛した。しかし、その人たちも、合宿を契機として短歌創作にはげんでいる、とのうれしい便りが各地から寄せられている。

なお、参加者の中にも多少あったが、講師、助言者の創作の大部分は連作であった。これは作者の胸中に湧いてくる緊張したさまざまな思いが、一首におさめきれなかったことから「連作」形式をとらざるを得なかったためである。したがって、その中から一、二首を選ぶというのは大いに慎まねばならぬのであるが、紙数のつごうで全部を掲載できなかったことは残念である。

短歌創作の助言に当たっては、作者が思ったまま、感じたままを飾らずに表現するように力を入れた。しかし、平素、理論的追求に走って論理的思考に馴れた人々にとっては、思ったままの感懐を素直に表現するということが、たしかに苦しいことに違いなかった。直接経験をそのまま言葉にすることは、本来幼いときから力を入れて修練しなければ、容易に身につくものではない。その心の苦しみとたたかい、素直な幼な心の良さを再び心が心のうちに取り戻してこそ、創作の喜びが体得できるのである。これが、実は現代人にとって大切な問題点の一つであるとわれわれは考える。この文集の「はしがき」の中に記した「精神的転回」という言葉の意味は、思想的転換、転向などということとは全く違って、人間の心が自由に働き、無限に広がってゆくことに目ざめることを指すものである。

それはともかく、こうした創作に続いて、各別に行なわれた相互批評は、参加者全員にとっても、主催者たちからしても、この合宿のきわめて重要な行事になっていることをご察いただきたいと思うものである。そうした意味で、以下に掲載した短歌については、同じ作者の感想文をもご参照いただいて、お読み願えれば幸いである。

短歌詠草

(しきしまの道)

オリエンテーションにて

九州大 西元寺絃毅

一言に祈りをこめて述べたしと切に求めし言  
葉言葉

まつすぐにわれを見つめしまなざしにおのず  
と声の高ぶるを覚ゆ

友だちのすぐなる心に響きしか思ひをこめし  
わが言の葉は

思ひをば力の限り伝へむと努めしあとの心す  
がしき

わがいのちこのひとときに友だちのいのちと  
ともにあるがうれしき

静かになりし山頂にて

福岡大 大草 宏一

静かさを取り戻したる山頂につばめは雲間を  
飛びかひており

日本大 橋内 英夫

足もとに急ぎ寄せくる白雲にふるさと偲ばれ  
なつかしきかな

富山大 岸本 弘

なごりおしこよひ一夜を友達と心ゆくまで語  
りすごさむ

亜細亜大 秋本 紹夫

鶴見岳に登りてみればやはらかき山並み遠く  
広がるぞ見ゆ

防衛大 大越 雅行

岩肌のまばらに見ゆる鶴見岳いま登らむと胸  
たかなりぬ

友だちのうれしき顔をのぞきつゝうまく写れ  
とシャッターを切る

東京大 香取 一昭

ゴンドラで登りてくればみはるかす九重の山  
に雲かからむとす

山小屋の炭火にあたり語り合ふ人をしみれば  
心なごむも

京都大 溝江 優

一言も聞きもらさじとわれを見る友の瞳は黒  
く輝く

友だちの心の中をかみしめて話す言葉ぞ胸に

しみ入る

福岡大 江口 研治

つっぱねる老先生の一言に日本男子の心見出  
ぬ

九州大 古川 修

班員の一人一人の言の葉に思ひを尽せと師は  
教へたまふ

岡先生のご講義を拝聴して

日本的情緒のなきを訴ふる師のみ言葉の響き  
はきびし

日の本の心をもちて立てと言ふ師のみ言葉は  
ありがたきかな

鹿児島大 中西 勝義

わが胸の暗き心にもしびを点じてくれし  
ことば多き

玉川大 二井 康雄

年老ひし師のお話を聞きしわれなど知らね  
どふるえ覚ゆる

京都大 榎本 雅之

我らいまこゝに集ひてもろもろに悩み来しこ

と語り合はなむ

鹿兒島大 徳田浩士

はたはたと国旗はためく屋上に西日の映えて  
美しきかな

山頂の草むらの中に一輪のうすくれなゐの花  
の咲きており

中央大 磯貝保博

力なく足らぬおのれをむち打ちて友に心を向  
けていかなむ

明けそめし鶴見が岳を眺むれば閉せし心開け  
ゆくなり

草深き山の斜面に飛び回る赤きとんぼを珍し  
と思ふ

京都大 松沢嘉彦

眺むれば眼下の雲の間より霞みてはるか湯の  
町の見ゆ

九州大 武田正義

野山をば歌うたひまた語りつつ友と歩むは心  
楽しき

黙々と長蛇の列を作りたる友らの中にわれは  
いまおり

亜細亜大 岡部篤厚

パスの窓ゆ眺むる谷に珍しき段々畑の稲穂美  
し

東京工大 天川東作

わが卑怯ここにはじめて見据ゑたり生きる  
といふは何ときびしき

鹿兒島大 中原嘉行

大空に飛び立つ友の無事願ひ心引き締めア  
セルをふむ

鹿兒島大 若松三郎

湧き出づる冷たき水のおいしさに流るる汗も  
とまる思ひす

東京工大 内田敏彦

行くパスの窓よりみゆる山々にわずかに偲ぶ  
秋の訪れ

下山して宿にていこふこのわれに淋しさ誘ふ  
ひぐらしの声

佐賀大 楠田幹人

にこやかに肩組み合ひて写真とる鶴見が岳は  
にぎはひにけり

亜細亜大 奥田栄

開会式想ひ浮べて黙禱す皆に遅れし列車の中  
で

九州大 古賀誠

遅れゆく汽車の進みももどかしく待ちおる友  
の顔を思ひぬ

共々に次代を背負ふ友だちと語り合ひたき事  
多くして

熊本商大 米田隆一

合宿の最後の夜の静けさにひとときは響くひぐ  
らしの声

東京理科大 高野治

流れ行く雲のかい間に日をうけて九重連山色  
づきて見ゆ

鹿兒島大 泉和人

駆け下りて息もきらずにかかへ飲む冷き清水  
にわれはいきづく

鹿兒島大 今別府勉

目の下に山また山のつらなりて雲影うつる城  
島高原

雄大な鶴見岳より自然の美心ゆくまで眺むる  
われは

亜細亜大 岩越豊雄

山深き小さき村のみ社に日露戦勝祝ふ碑のあ  
り

力強く刻みし字にも偲ばるる明治のみ代の村  
人の喜び

人もこぬ山の社の道ばたに老婆は一人草むし  
りしており

西南大 村山勲男

耳つんぼの祖母はねられて死にたまふ二度と  
会へないかなしさよあ

鹿兒島大 藤崎 義之

一列に並びて降りゆく友だちに力いつぱいよ  
びかけるかな

丈高き草木の間に見ゆる友われも駆け下り共  
に行きたし

駒沢大 柳川 正治

頂上に大きく響く歌声にわれも溶けこみ腹か  
ら歌ふ

長崎大 森重 忠正

鶴見岳長き山道下り来てふもと近くにみ社の  
あり

「奉納」といふ文字の書かれし手ふきんの色  
は真白く軒にかかりて

けがれなき布の白きを見つめつつ歎げし人の  
心思ひぬ

石道は茂れる杉の中にして緑のこけにおほは  
れてあり

玉川大 益井 重正

鶴見岳と由布の岳とのその底の紅葉の谷をわ  
れはたどりし

亜細亜大 藤沼 弘一

鶴見岳の頂に立ち眺むれば眼下に迫る九州の  
やまなみ

東京理科大 野口 清

台宿の疲れし心吹き飛ばす鶴見が岳の眺めす

ばらし

九州大 脇坂 佳秀

夏木立にひぐらし鳴きて高原のひとはまさ  
に暮なむとす

草原にすゞ風吹きて虫の音のひとたびやみて  
また鳴きそろひぬ

宮崎大 望月 俊毅

風邪ひきしわれを友らは気づかひてあたたか  
き言葉かけてくるなり

老ひの身の師が火の如く語り行くその言の葉  
の胸に迫りく

下関市大 梅谷 道明

日の本に嵐迫れるこの危機をわが同胞にいか  
に知らせむ

早稲田大 今林 賢郎

集ひ来て君にまみえし緑ありて君を知り得し  
そがうれしきよ

ますぐなる心もちたるみ友らのすがし言の葉  
胸に迫りく

書開き友らと共に読みゆきぬまこと求むるひ  
とつごころに

防衛大 貝吹 孝夫

白雲の足もとに立つ山頂に色ぞゆかしきみや  
まきりしま

長崎大 内田 英賢

涙して語れる友の姿見てわが胸内は熱くなる  
なり

重なりてはまた重なれる山脈をわれを忘れて  
眺めけるかな

天上を覆ふ煙雲うねりつつ疾風の如く走り行  
くなり

かなたより馳せくる雲はたちまちに大なる山  
をつつみかくせり

鹿兒島大 田淵 勝次

みわたせば緑なす山のただ中にひときは青く  
志高湖の見ゆ

福岡学芸大 向山 晃

山頂より別府湾を見下せば思ひ馳すなり幼き  
日々に

亜細亜大 山内 建生

高原より九州の山眺むれば夕日に霞さだかな  
らずも

岡山大 波多 洋治

講孟の道を説きたるお言葉の胸に響きて迫り  
くるかな

鹿兒島大 中村 絃昭

別府なる鶴見の山に咲き残るわがふるさとの  
みやまきりしま

九州大 春藤 純生

切々と思ひを述べる友だちのまごころに触れ

うれしかりけり

岐卓大 溝 口 徹

緑なす高原のかた凛として由布のみ嶽は天に  
突きたつ

亜細亜大 宝 辺 幸 雄

日本的情緒を持てとさとさるゝ岡先生のきび  
しき言の葉

師と友と小さきお宮の真清水をうましようまし  
と言ひて飲みけり

岡山大 菅 志 郎

なだらかな山の間にはのがすみ由布のみ岳は  
空に突き立つ

早稲田大 飯 高 敏 弘

登り行くケーブルカーの窓のしたに緑の高原  
ひろがりて見ゆ

神戸大 寺 川 真知夫

岳下るそば道のへに名も知らぬ小さき花のお  
ちこちに咲く

道の辺に生ひたる山梨そを取りて友のくれし  
を口にするなり

山梨をひと口かめば甘ずばき味ひろごれり口

にこもりて

黒松の天に伸びたるみ社の杜うす暗く鎮もり  
ており

亜細亜大 永 島 学

人しれずたゝたゝ静かに草を取る人の姿の尊

くもあるか

とつとつと語りし友の言の葉におのがおごれ

る心はずかし

真剣に道を求むる友だちのまなこ輝きわが目  
を射りぬ

大分大 川 村 柴 男

はじめの合宿に臨むわが胸は期待と不安に  
揺るゝを覚ゆ

日本大 桜 井 郁 三

敷島の大和男の子の心意わが友だちと共に  
語りむ

鹿児島経大 野 口 竜 興

いにしへの人を語りし先生のお言葉深くわが  
胸を打つ

高崎経大 広 田 耕 一

就職に破れ破れてうちのめるわれをばげます  
あたゝかき母

高原に今日集りし友人と心打ちあげ語り尽く  
さむ

鹿児島大 北 島 照 明

真寂しく城島の原に鳴り渡る風にまじりて虫  
の声する

まなかひの鶴見が岳の山すその広き野原に夕  
雲なびく

京都大 浦 田 嘉 人

高原の豊かな土に根をおろす緑木のごとわれ  
も伸びたし

京都大 井 上 慎 一

汗ふきつゝ山道を来れば岩かけに湧き水のあ  
り飲まざらめやも

汗にぬれほてりし腕に湧きいづる冷たき水の  
心地よきかな

知らぬことを知らぬと呼ぶ師の君の強きみ言  
葉われは忘れじ

東経大 竹 本 晃 之

秋近き鶴見が岳の頂にあざみの花のそつと咲  
きおり

雲流る鶴見の山を見上げれば空に飛びかふ赤  
とんぼ見ゆ

九州大 片 岡 健

たちならぶ杉の木立を見おろしてロープウエ  
イは静かに下りゆく

鶴見なるみ岳はかくも高きかな眼下の方より  
雲の立ちくる

東京大 長 川 達 夫

熱こもる師の君と友の言聞けばわが考への甘  
さ身にしむ

鹿児島大 藤 原 正 教

道標に帽子をかけて肩を組みカメラに写る君  
ほゝゑまし

早稲田大 平 田 誠  
足もとに連なる山を見おろせば別府の町は小  
さくぞ見ゆ

岡山大 落 合 嘉 信  
岡先生のご講義を聴いて

われのみかこみあぐる涙おさへつつ友らもと  
もにご講義を聴く

岡山大 孝 忠 康  
人と人の信じ合ふことのむづかしさうちあけ

くれし友あるが嬉し  
真心をつくして人に接さむと二人で確める心  
と心を

亜細亜大 地 田 邦 彦

雄大な城島高原見わたせば心せまきがはずか  
しきなり  
初めての多き友らと夜遅く相語らもむあとわ  
ずかなり

長崎大 長 島 俊 一

高々とかすみそびゆる由布の岳雄々しき姿  
に我を忘るゝ

鹿児島経済大 東 照 美

歌よまむ心はあれどいかにせむ言葉にいでこ  
ぬ我が心かな

亜細亜大 諸 角 雅 夫  
わが言葉たらぬがゆへと思へどもとどかぬ胸  
を寂しくぞ思ふ

鹿児島大 中 原 嘉 行

病き足引きつり下る山道に湧水ありてのどを  
潤す

鹿児島大 高 吉 親 信

合宿へゆかむと心躍りつゝ夜汽車に乗れどな  
かなかねむれず

鹿児島経済大 田 辺 敏 雄

鶴見岳肌に吹きくる清き風友と語りつ和歌を  
よみけり

西南大 古 賀 宣 弘

玖村先生のご講話を聞いて  
我もまたなりたや真に日の本を背おひて生く  
るますらをのこに

長崎大 白 井 孝

友達と歌うたひつゝ下り来て飲みし清水の腹  
にしみ入る

大阪経大 南 修

玖村先生のご講話を聞いて  
合宿の最後の夜のみ教へにひた聞き入れば心

清しき

法政大 鈴 木 弘

先人の残せし言葉聞きをれば胸高鳴りぬ我も  
学ばむ

鹿児島経済大 野 中 民 生

頂に登りてはるか見渡せばかすかに見ゆる久  
住連山

九州大 三 島 悟

鶴見岳に我立ちおれば谷間より雲の立ち出づ  
うす陽の中に

鹿児島大 矢 野 信 一

城島にて集へる友と共に心開きて語りゆか  
なむ

早稲田大 鈴 木 陸 三

下り路を友らとともに高らかに歌を歌へば心  
はれゆく

早稲田大 宗 巖

岩かげにかそけく咲きしあざみ花山路を下る  
我をはげます

電子工大 末 永 広 司

フロントの前に立ちあゝし彼の友の話しかけき  
ぬ身の上までも

日本大海野 正博

友だちとはぐれし山の細道にふと見つけたり

石の地蔵を

山なかの静けき社の境内に一人の老婆草刈り

ており

和歌相互批評にて

九州大 友池 仁暢

久々に己が思ひをいつはらず歌ひあげしとわ

れは思ひき

一首一首進むにつれてじんじんとわが胸打た

れ涙湧き出づ

玉川大 原 正昭

清らかにホテルの庭に咲きし花赤白黄いろ色

とりどりに

鹿児島大 森 哲郎

友だちの体験したる真実の言の葉聞けば胸ふ

さがりぬ

九州大 稲津利比古

全国ゆ集ひ来ませる友らとの奇しき縁を大切

にせむ

若者の胸ぬち深く国思ふ心なければわが国危

ふし

師の君の切々と語る姿みてわれも後にぞ続か

むと思ふ

神戸大 深津 春義

先生の一つ一つの言の葉に求め得がたき慈悲

うかがへり

横浜国大 青 本 茂

ひぐらしはおのがいのちの短きを知りて鳴け

るかなしその声

岡山大 伊藤三樹夫

若者の燃ゆる思ひを一にするとともに語りし日

々は尊し

風涼し城島の宿に友集ひ今宵も語らむ思ひを

こめて

東京学芸大 落合 信雄

われ知らず顔ほころびぬ幼な児のけがれを知

らぬ言葉を聞きて

亜細亜大 藤原 康雄

先輩の語りし言葉の身にしみて山路下りつゝ

新たに噛みしむ

熊本大 平 休 憲

就職のためとはいへど中途より去る合宿に心

残り

友らみな集ひて道を求めゆくにわれのみ一人

去るがくちおし

列車の中にて

いつしかに雨足強く窓を打ち合宿の地の思ひ

やらるゝ

雨よやめ霧も晴れてよ友どちの鶴見に登る日

にこそあれば

車窓より鶴見のあたり見上ぐればさやかに晴

れて緑目にしむ

九州大 宮崎 義美

先輩の教へる歌を友だちとあとをつけつゝ山

路下るも

防衛大 黒川 雄三

見渡せば四方の景色の秋めきて豊後山並み霞

かかれり

見下せばほのに霞める湯の街の港を船は静か

に進む

神戸大 常陰 武良

こんこんと湧きくる泉のそのごとく大和心を

はぐくみ育てむ

京都大 福島 義治

昨日まで名前も知らぬ友だちとともに語れば

心楽しも

愚なるわれの話を一心に聞く友だちのありが

たきかな

赤星 宣利

むらさきの山畳々と続きおり日本の山河新し

く見ゆ

大城 東

心より語りつ登る鶴見岳その思ひ出をとほに

忘れじ

甲斐 幸雄

ゴンドラの上よりながむ杉木立子らの鉛筆の

キヤップの如く

若人の歌声聞きて心地よくわれも勇みて山を下りぬ

向山 正

癌に臥す友をしのびて

高原の夜半のしぐまに友の死の近きを思ひ胸迫りくる

中村 昭

雨よ降れ風よいや吹けますらをのひとつのか念ひ貫かでは

土佐紀行

その昔貫之の来しこの国をわれなつかしみ山越えて来ぬ

苔むして今はその名もさだかならず野中婉女の墓は悲しき

うからやから皆絶えはてゝ兼山の墓はさびしく黙しをりたり

伊集院 豪

きぜんとして話されるお言葉わが胸に針さす如くいたくしみこむ

見渡せば遙か彼方の尾根近くのびゆく雲の流れ静かに

古都に遊びて

桑原 卓

聖徳のみ子を偲びてさまよへば夏草繁し大和

路の旅

うつせみのひとにしあれば恋せむに日光ほさつ月光ほさつ

阪本 昌夫

ひとの道きはめむとして集ひきし友は語りぬ夜のふけるまで

金子 寿和

こともなげに職場を変ると言ひし友発車のべルに涙流しき

西岡 静雄

若人の道を求むるはらからと共に語らむ今日ぞうれしき

高瀬 邦夫

語らへば閉せる心開けて友のひとみの輝きて見ゆ

西南学院大 大村 圭子

歌を詠む心を知れと説く友のまなざし強くわが心うつ

岡山大 花田美登里

緑なる高原のうねり見下ろせば久し振りにて心安らぐ

玉川大 高橋 愿枝

合宿でいとも素直な友を得て心の中で洗はるゝ思ひす

東京女子大 梅田 咲子

緑なる城島の原の空高く夕日をあびて雲の流れ

るゝ

男の子らの力こもれる発言を聞かせてやりたしわが弟にも

学習院大 小田村 静代

師と共に心一つに求め合ふ友らの思ひそのまなざしに

九州大 有川 郁子

先生の生命あふるゝお言葉に熱き血潮の流るゝを覚ゆ

鹿児島大 林佳 世子

生命をも惜まず恋に生くるてふ大和なでしこにわれもなりたし

師のことばひとつひとつにみちあふる大和ごころをわれも継ぎたし

玉川大 勝山 啓子

花も実も摘んで帰れといふ祖父の言葉の深さしみじみと思ふ

新潟大 水野 雅子

やはらかに山おほひたる青草は講義につかれしわれをなぐさむ

福岡女子大 杉本 行子

心はずみ山登らんと汽車待つにうめぼし袋持ちきたる母

東京女子大 長石 真澄

もくもくと足もと見つめ歩きつゝまた立どまり野花楽しむ

鹿兒島大 藤本寿美子  
九重山の雲間に続く山脈はうすく青みて墨画の如し

津田塾大 友清 容子  
友どちと歩みきたりし草むらに生命をかけて虫のなきおり

武蔵野女子短大 田川美代子  
野草みて野草のいのち思ふ時人息つくと師はいひ給ふ

奥様といたはりあいつ帰らるゝ師を玄關に皆送りぬ  
いく度もふり返りつつ帰らるゝ師のみ姿の尊  
きろかも

東京大 勝山早久良  
友どちと小さき花の名尋ね合ひ顔ほこるばせめづる嬉しさ

谷間よりわきのぼりくる白雲の風に吹かれて  
広がりゆけり  
草むらに群れて飛びかふ赤とんぼ夕陽を浴びて羽のきらめく

上田 通夫  
何となく心うれしも稚<sup>なま</sup>なかるわが歌よしと人言へるとき

散り残り風に吹かれてさゆらげるみやまきり  
しまの赤き花はも

日本的情緒といへる言葉もて君は仏の慈悲説き給ふ

毛利 潮  
たじろがずまた切実に真心を語る若人識り得たるかな

足もとの大地ゆらりと揺るゝ如し静かに赤く昇る陽見れば  
木内先生を

手力男の命偲ばゆたくましく世界の岩戸開かむとする  
国の事我が事として思はずば誰の国にか成らむとすらむ

百瀬 素明  
過ぐる日は御著書ひもどき慕ひこし師のみ姿に今ぞまみゆる

ありがたき急にしなりけり眼前に師のみ言葉に胸迫る我は  
パネルデイスカッションを聞きて

沢部 寿孫  
たじろがず深めゆかなむ先哲の言の葉草にもる思ひを

み国いまだならぬときみおやらの思ひ正しく継ぎて生きなむ

永久の生命に触るゝ悦びをこの合宿に思はしめらる

加藤 善之  
あさみどりすみなす空にそそり立ちあたりを  
はらふ自由布が御獄は

高原の木の間にぐれに聞く鳥の声のすがしも  
風のまにまに  
岡先生の人格に接して

まちがひは直ちに正せとのたまひし厳しきことば胸にしみ入る  
三重野 悌次郎

鶴見岳にて  
あらがねの地の折りなす山波の起伏は青し豊の国原

頂きに湧く白雲のたちまちにうつりて淡く空に消えゆく  
亀井 孝之

顔色がさえぬがどこが悪いかとまゆをひそめて友は言ひたり  
心知る友の言葉はうれしかり一言にても心なごみぬ

いままさに日ののぼらむとして東の山の頂き  
赤くそまりぬ  
小 泉 明

若きらの中にまじりてひつそりと講義に聞き入る  
参加者の名簿をみれば  
参加者の名簿をみれば  
若きらの中にまじりてひつそりと講義に聞き入る  
参加者の名簿をみれば  
若きらの中にまじりてひつそりと講義に聞き入る

若きらの中にまじりてひつそりと講義に聞き入る  
参加者の名簿をみれば  
若きらの中にまじりてひつそりと講義に聞き入る  
参加者の名簿をみれば  
若きらの中にまじりてひつそりと講義に聞き入る

六十路をこえ八十路をこえし老女二人はつかれもみせず講義にきゝ入る

国武忠彦

筑後川

眼前に現はれにけり筑後川はしけきさまに心はさわぐ

筑後川この川沿ひになき父は自転車に乗り日田に通ひき

わが父は絵筆をもちてこの川をひぐらし画くが愉しみなりき

小林国男

鶴見岳山頂にて

はるかにも見はらしつゞく空と海山をのぞめる鶴見のいただき

いく年ぶりあひ見し友とはるかにも雲にかくるゝ九重をみるかな

長内俊平

合宿生活を

日本人となるは難しもさはされどわれらをおきてだれかしかせん

夕映えをへ残しつ嶺のくれゆけば地に泌むごとくひぐらしの鳴く

再びも生きゆく力わがむねに静かにゆたかにみち来る如し

班別討論にて

松吉基順

涙ながし思ひを叫び訴へる若きをのこの言葉尊し

純真な若人の叫び身にしみて城島の宿ゆ去りがてぬかも

上村正波

鶴見岳下山のとき

急ぎ足山路を下る白シャツの友らの背にも木もれ陽走る

山本博資

全体交歓の場にて

学びたることもども楽しく語りゆく友のかんばせはれやかに見ゆ

握手する友のひとみはかがやきてこの集ひをば「尊し」といふ

この言葉この思ひをば忘れじと新たな友を求めきたし

上村和男

班別討論にて

国論の二分分裂の悲しみを悲しみとしてうけむ我らは

美しき祖国の命を信じつゝ吾らははげまむ生命もろとも

独立の国なる祖国を分裂へ追ひやる思想とながりを絶て

徳地康之

憂ふべきことも知らぬと師の君は力強くも訴

へ給ふ

一言一言心をこめて説き給ふ師の御言葉の強きひゞきは

師の君の心こもれる御言葉を心に留めつゝ学びゆかなむ

野間口行正

先人の真心こめてきづきたる御国の生命に参じ生きなむ

国のためつくせる師らのみ言葉は心にせまりて勇気わきいづ

西川年栄

班長会議を聞いて

師と共にまことの道を求めつゝ語りあかさむ夜のふくるまで

盛永悦子

暗き道かきわけながら下るとき道端に一輪の愛らしき花見つゝ

川井修治

一年の思ひをこめし甲斐ありて今開けむとす城島合宿

おちこちゆつどひ来りし友どちの顔をし見れば力湧きくも

豊の国城島が原の空高く生命のほのほ燃やしつゝさむ

行武靖枝

面ふせ友はもだせり苦しがる心いだきて生き

こし友は

ひととせの月日めぐりてつゝがなき師のみ姿  
に逢ふが嬉しさ

田中秀男

久しくも相見ぬ友に会はむとはやる心にお  
れかけつけぬ

久々に友の顔みて声聞けば過ぎし年月忘るゝ  
こゝちす

瀬上安正

濃みどりの高くそびゆる山の辺に友等集ひて  
御旗掲ぐる

日の御旗風のまにまに昇りゆきてさやか風の  
見ゆる心地す

壮重の楽の調べの流るゝに身内しまりて心高  
なる

小泉一也

田口君に

左手でかきたるたより二度までもよさせし君  
の病はいかに

小浜にて合宿おもふとふ君がたよりたずさへ  
つきぬ合宿の地に

山波はみどりしるけく吹く風はひやゝかなり  
と友につげなむ

徳永正己

心尽し友等と共に書を読めば先人の声の響く

思ひす

道を求め求め続けし先達の髪の白きに涙こぼ  
れぬ

まだひつゝ四十才を過ぎてまたまどふ己が心  
を恥づかしと思ふ

名越二荒之助

講孟余話をよみて

二千年をへだてゝ孟子松陰の心に生きつゝ叫  
ぶきびしさ

鉄の鞭ふりかぶりつゝうち振ふ言葉生き生き  
わが耳どよもす

永久の良図を捨てゝ目前の近効に従ふと衝き  
し師の君

山田輝彦

合宿開始

五とせのいたづき癒へて来し友の野太き声よ  
ひたになつかし

亡き友ら病みし友らのつきせざる思ひかしこ  
み合宿に入る

息の緒にこの一筋を思ひつゝ過ぎ来しものか  
これの十年は

脇山良雄

若き友集へる宿につきにけりさてこそ我も打  
ちや語らむ

我が宿の窓辺ま近くそびえ立ち鶴見の岳はみ

どりにじめり

日の本の遠き理想を念ふごと高原のはてに見  
ゆる群れ山

小柳陽太郎

西元寺君の所信表明をきく

すぎし日のためらひすてに今はなくおもひ爽  
やかに君語りゆく

りん／＼とひびくことばの身に迫り思はず涙  
あふれいでむとす

ありがたきゑにしなるかな若きらとおもひ一  
つに生くるつどひは

青砥宏一

まひるまの暑きひうけて赤瓦ひかる家並つゞ  
く石見路

山の上の入道雲に入日さし豊後国原日の暮れ  
むとす

夜のしじまあたりおほへどさしてゆく宿舎お  
もへば心にぎはし

島田好衛

みはるかす豊の山脈やまなそが中に天そり立つ由  
布の岳はも

豊の国の天もどろに火を噴きしいにしへ思  
ほゆ荒き岩根に

そり立つ由布岳のごと揺がざる心を持ちて  
生きむとぞ思ふ

あとがき

この感想文集の出版を思い立ったのは、秋もようやく深まろうとする九月二十三日、都内飯田橋の東京大神宮で行なわれた慰霊祭の直後であった。この慰霊祭は、当会の前身である旧制第一高等学校昭信会の若い学生たちが、聖徳太子を道のしおりと仰いだ黒上正一郎先生亡きあと、翌昭和六年いらい三十余年間、毎年欠かさずに営んできたものである。

戦前、私どもが出版した「黒上正一郎先生遺歌集」のはしがきに、いまは亡き田所広泰先輩が「われらにとつて、その死は限りある生命を無窮の祖国生命につなぐ方途である。黒上先生はじめ同信師友の死をわれらはかくのごとく実感し、その死にあり、その靈魂を祀ってわれらもまた同じき道を継ぎゆくものである」と知ることを得て、生死を超えた現実の共感世界に生きてきた」と記しておられる。私どもは毎年の慰霊祭で、亡き師をはじめ祖国の永遠の生命を信じ、若くして死んでいった百余柱の先輩、同輩のみ霊を祀ることによつて「悲しき、しかしながらにぎわしき生」を実感する。そして亡き師友の志を受け継いでゆこうとする決意を新たにさせられる。こ

の慰霊祭場で受けた感動が、私どもに「創立十周年記念の集いを開こう」「感想文集を出版しよう」と思い立たせたのかも知れない。私どもは、天がけりつつ、み国を守らせ給う亡き師友のみ心が、混乱した時代に生きる私どもの心に通いきて、それを啓示してくれたものと思う。

この感想文集をなんとしてでも「十周年記念の集い」までに作りあげたい、いや作らなければならぬと、数名の編集委員を中心にした在京会員は全力を傾けて事に当たった。当会は専従者をもたぬため、日曜日の返上はもとより平日は各自の勤めを終え、午後六時ごろから事務所に集まり、国電のなくなる午前零時すぎまで原稿の整理、編集作業に没頭した。この仕事は二週間余も続いたが、この間合宿教室に参加した学生諸君と、当会員の若い社会人十数名が、ザラ紙に書いてある約百八十の感想文および短歌を清書してくれた。この人たちの協力がなかつ

たならば、この感想文集は十周年記念の集いまでにできなかったと思う。ここに特記して謝意を表したい。また十日足らずの短時日で印刷、製本を完了してくれた奥村印刷および東美印刷所の関係者にも心からの謝意を表したい。

この文集の編集その他については、前記の理由から拙速主義でやらなければならなかった。このため内容、体裁等についても意に満たないところが少なくないが、それらはすべて編集委員の責任であり、不十分な点はどうかお許し願いたい。(S)

× × ×

(資料)  
第十回 合宿教室 (別府市 城島高原) 感想文集

非売品

昭和四十年十月二十日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七の三柳瀬ビル

社団法人 国民文化研究會

理事長 小田村寅二郎

編集委員 島田好衛・小泉一也

長内俊平・上村和男

香川亮二

電話 (五七二) 一五二六〇七番

